

〔翻訳〕

ナチズムと古代

—1933年から1945年にかけての古代史専攻の動向の研究—（その3）

フォルカー ローゼマン 著

酒枝 徹意* 訳

— 目 次 —

第1部 大学における古代史専攻（1933-1945）

第1章 大学の＜肅清＞と古代史専攻

第1節 政治的、人種的迫害の犠牲者としてのドイツの古代史家たち
(1933-1945)

第2節 ドイツ古代学の＜亡命による損失＞

付録 ドイツ帝国における古代史講座教員配置（1933-1945）
(以上、129号)

第2章 抗争し合うナチス大学政策における古代史講座の教員配置
(1933-1945)

第1節 古代史専攻の教員動向に関する概観

第2節 大学政策を担っている者たち

第3節 大学における古代史及び古典文献学専攻の代表者たち

第4節 講座の配置（1942-1944）
(以上、131号)

第3章 古代学自体の言行

第1節 戦争開始までの動向

第2節 ナチス大学教員同盟の＜合宿活動＞

第3節 ＜古代学の戦時動員＞
(以上、本号)

* SAKAEDA, Tetsui 本学名誉教授

第3章 古代学自体の言行

招聘審査と同様、会議や集会、それにナチズムの学術動員の特別な形態における古代史専攻自身の言行も、古代史専攻がナチズム的文化＝学術政策の諸要求といかに対決したのか、その点の重要な手掛かりを提供している。古代史分野は比較的組織化されておらず、独自の専攻団体に纏まっていなかったことで、古代史家たちは古典文献学者たちのように権力掌握後直ちに纏まって現れ得ることがなかった。ヴェルナー・イエーガーはその代表者として、〈古典文献学者・連盟〉(Altphilologen-Verband)の議長エーミル・クロイマン (Emil Kroymann) と共に、1933年7月プロイセン文部大臣ルストに『古典文献学界を揺り動かす諸問題』を提出した。後に、同盟によって仕上げられた『ドイツ・ギムナジウムの今日的意義』と云う〈主旨〉(Leitsätze)が、文部省に提出された⁽¹⁾。更に、イエーガーは、彼の周知の論稿『政治的人間の育成と古代』で公式的な根拠を提供したのであるが⁽²⁾、指導的なナチス教育学者エルンスト・クリーク (Ernst Krieck) と活発な論争が燃え上がった⁽³⁾。一方、歴史学の一部として当然古代史も代表していた歴史家連盟 (Historikerverband) は、歴史学の全専攻の利益代表者として理解されていたが、その事由で古代史家たちの特別行動に対して組織的制約を押し付けはしなかった。〈適切な方法で、ナチズム志向の同僚たちとの時宜に合った関係を保ち〉、かつく今後、ひょっとして外部から迫られる政治的《同質化》の企てに先んじるべく努めていた1933年6月、ヘルムート・ベルフェが連盟の委員会⁽⁴⁾で補欠選出されても、この点は変わらなかった。古代史専攻自身の言行は、1933年以来、主として古代学ないし歴史学の相応の組織形態の全体的枠組に制約されていたが、シャッヘルマイヤー、ベルフェ、それにヴェーバーの夫々の寄稿論文のような個々の論稿の内にある程度先ず現われていたのである。

第1節 戦争開始までの動向

権力掌握後初めて、1935年に催されるはずであったこの専攻グループの通常の種々の行事は実現しなかった。その場合、第一に重要であったのは1935年10月に召集された《古典古代学専門大会》が、ほとんど通常通りのプログラムの告示直後に理由も示されずにまた中止されたことであった⁽⁵⁾。同様に、1935年9月ハノーファーで歴史家大会を举行すると云う計画も御破算になった⁽⁶⁾。1935年10月19日、

その所長ヴァルター・フランク (Walter Frank) の下に多額の費用をかけて実現された《帝国現代ドイツ史研究所》(Reichsinstitut für Geschichte des neuen Deutschlands) と、その件は無関係であった⁽⁷⁾。この帝国研究所の固有の研究領域は、かなり新しい歴史の分野、取り分けくフランス革命からナチズム革命の間の時代空間⁽⁸⁾にあった。フランクの帝国研究所と同方向で、中世研究に対しては、〈モヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ〉—中央統括部を継承する《帝国中世ドイツ史研究所》(Reichsinstitut für altere deutsche Geschichte) が設立されていた⁽⁹⁾。それに対して、古代史に対して何らかの比較され得る研究施設が尽力されていたと云う手掛かりは全くない。古代史家たちは、限定されてはいたが、《ドイツ帝国考古学研究所》及び《ローマ＝ゲルマン委員会》に研究機関的な後ろ盾を認めていたのであった⁽¹⁰⁾。

1937年11月、フライブルク大学の古典文献学者ハンス・ボグナー (Hans Bogner) の《帝国現代ドイツ史研究所》顧問への招請が、古代史との緩い結びつきを結果的に生んだのであった。ヴァルター・フランクの言葉によれば、〈ローマ・ギリシア古代学との媒介者〉として、ハンス・ボグナーは⁽¹¹⁾く《政治的学問》の方向を、政治的意志と学問的成果の結合に認めていた。彼は・・・古代史の分野で同様の精神的変革を遂行していたが、そのことは、同時にまた歴史叙述の他の構成部分とか、更に他の学問の専門諸領域でも概して評価を得ていたのであった⁽¹²⁾。フランクは、同じ脈絡で、—ボグナーの著書『現実のデモクラシー、古代の教訓』⁽¹³⁾の論評が扱われていたが、—その本で、ボグナーはく単に、或いは主として専門家仲間 (Fachgenossen) だけではなく、国民同胞 (Volksgenossen) 〉に依拠していると称賛していた⁽¹⁴⁾。

ボグナーは、フランクの最も親密な協力者には入っていなかった。帝国研究所の所員として、主題をギリシア史に捧げていた講演で彼は頭角を現し、帝国研究所の〈最も生産的な〉部局であった《ユダヤ人問題研究部》の様ざまの催し物に活発に加わった⁽¹⁵⁾。ボグナーを迎え入れることで、フランクはく《研究の専門的細分化》の危険⁽¹⁶⁾を避けようとしたのであった。ヴィルヘルム・ヴェーバーが1939年9月所員仲間を迎えられても、帝国研究所が古代学のための育成施設 (Pflegestätte) になることはあり得なかった⁽¹⁷⁾。フランクが、たとえく古代に魅了されていることを、彼のフューラーと分かち合っていた〉としても、古代学研

究に対する実際的な刺激が、彼から齎されることはなかった。彼の研究所の開所式の挨拶で、彼は、ドイツ帝国考古学研究所（DAI）の財政的資金に対し羨望に満ちた眼差しを向け、＜他国の古代の研究＞のためにそこではどの位の額が消費されたのであろうかと、以前にむしろ不満を述べていたのであった。⁽¹⁸⁾

帝国〔＊現代ドイツ史〕研究所の開所から僅か2年後に、エルフルトで第19回ドイツ歴史家大会が催されたが、フランクと彼の戦う仲間たちは、自ら＜ドイツ歴史学におけるナチズムの特殊部隊＞としてそこに現れるつもりだった。フランクは、その大会の成り行きに強い影響力を疑いなく及ぼしたが、しかし、＜決定的な突破＞には成功しないままであった。⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾

古代史の分野では、帝国研究所は、ボグナーの『ツキュディデスと古代ギリシア歴史叙述の本質』と云う講演によって代表されたが、それは、新聞ではちぐはぐなものと感じ取られ、明らかにまた、仲間内にも特別な印象を何も残さなかったのである。⁽²¹⁾⁽²²⁾ 一方、その論稿『テオドリック大王と彼のローマ的課題』が、フランクの当初からの異論に対抗するものとプログラムで受け取られていたヴェルツブルク大学の古代史家、アレクサンダー・グラーフ・シェンク・ツ・シュタウフェンベルクは、はるかに広範な反響を見たのであった。⁽²³⁾ フランクの視点によれば、シュタウフェンベルクは、＜民族的要素を、不当に軽視＞していた。⁽²⁴⁾ フランクの仲間のエーリッヒ・ボッツェンハルト（Erich Botzenhardt）は、＜その当時の諸教会の態度の研究＞が欠けているのに困惑し、注目すべき方法論的示唆と共に彼の批判を明らかにした。即ち、＜起こったこと（Die Dinge）は、たとえ史料になくても、そこにあるのである＞。⁽²⁵⁾ フランクの陣営からの〔＊シュタウフェンベルク〕批判や彼の最良者の論稿は、一大会参加者たちの発表したものだけでなく、新聞の論調もまた、そのことを示していたが一反駁されないままでは済まなかった。⁽²⁶⁾ あるイタリア人観察者は、＜エルフルトのゴート人騎士＞がテオドリックをゲルマン的国家思想だけで解しようとしているとその試みを揶揄し、歴史家大会に対して「歴史的なナチズム信条のニケーア公会議」と荘重に語りかけていた。⁽²⁷⁾

エルフルト大会から1年後、チューリヒでの第8回国際歴史家会議において、国際的舞台でその真価を証明する機会がフランクに到来したようだった。けれども、それがこの人物の特徴であるが、帝国研究所の所長はその会議で一人の観察者の役目に甘んじたのであった。⁽²⁸⁾ 古代学部門には、『ローマニタースとゲルマニター

ス、ドイツ南部地域におけるその対決』と云うヴィルヘルム・ヴェーバーの講演が、はじめフランクによって申し込まれていた。この講演は、全く早々に撤回されたのに違いないのであるが、場合によって文化政策的な配慮がそのことに決定的であったのかも知れない。既に準備段階で論議を呼んでいた別のテーマも、ドイツ側の者によって講演リストから削除された。ヨーゼフ・フォークトによって申し出られていた『ユリアヌス皇帝とユダヤ教』と云う短い報告は重要であった。フランクは、この決定に確かに関与しなかったわけではないが、フォークトもまた、彼の報告を後に《帝国研究所論文集》(Schriften des Reichsinstituts)に載せるのに成功しなかった。⁽²⁹⁾ フォークトの論稿は確かにフランクの考えに相応しくなかったことを無視しても、準備委員会の他のメンバーたちは、国際的な読者を前にして、《ユダヤ人問題》を取り上げることに既に全く関心を持っていなかった⁽³⁰⁾のである。ナチズム的古代学の唯一人の代表者であり、チューリヒでも全般的に発言を求めたハンス・ボグナーは、フランクによって彼に割り振られた《鑑定人》⁽³¹⁾(Sachverständige)の役目に満足していたのであった。⁽³²⁾

古代学部門の様ざまの議論では、チューリヒにおけるドイツ代表団の偏に控え目な態度のみならず、ドイツ歴史学の人種問題との対決に特徴を持っていた全く特有のナチズム的価値評価が感じ取られただけであった。インスブルック大学学長、中世史家ハロルド・シュタインアッカー (Harold Steinacker) は、ポーランド人古代史家T. ヴアレック-チェルネスキー (T. Walek-Czernecki) の『古代世界没落の真の原因』と云う論考に対する論評の中で、〈民族性〉(Volkstümer)の下はかなり深層の〈生物学的基盤、人種的能力〉(das biologische Substrat, die rassistischen Kräfte)を話題にしていた。彼は、そこに現代的な歴史的視点を認めたのであったが、〈その点の議論は、この場では早まっているであろう。何故ならば、この視点は、入念なモノグラフ的な研究において初めて真であることが実証され、完遂されるに違いないからである〉⁽³³⁾。広範な議論の経過から、シュタインアッカーの問題提起に対し何ら興味を示さなかったことが推定されることを、チューリヒ歴史家会議の古代学部門の参加者たちは明らかにしていた。この議論の場以前、かなり前に『アリストファネスと社会・経済史の諸問題』と云うヴィクトル・エーレンベルクの講演によって、その当時なお示され得たドイツ古代史学の別の伝統が確認されていたのである。⁽³⁴⁾
⁽³⁵⁾

エルフルトとチューリヒの歴史家大会〔＊／会議〕をめぐる出来事は非常に限定されているが、古代史の動向に対する帰納的推理を許している。しかしそれでも、専攻の一体的な傾向とか、ナチスの古代史家たちのグループの一致団結した態度は話題にならなかったと言っても良いであろう。時代に制約された問題提起が取り上げられたところでは、個々の研究者のイニシアティブが重要であったが、その結果は必ずしも常にナチズム的歴史思考の公式の路線に一致していた訳では決してなかった。例えば、古代学において《ユダヤ人問題》についての議論が始まる場合、積極的に加わっているナチス主義者たちも、個々人のイニシアティブを超えることはなかった。その際、一ここでは、両方向に与えられている裁量の余地が明らかになるが一、古代学者が、剥き出しの反ユダヤ主義的宣伝のために働く⁽³⁶⁾と云うことも起こり得たのである。

第二次世界大戦の勃発直前にベルリンで開催された第6回国際考古学者会議は、エルフルトとチューリヒでの集会よりも、ドイツ古代学の動向のより鮮明な姿を⁽³⁷⁾当然伝えている。この会議は、古典考古学とその隣接諸学自体の言行と関係があるだけではない。それどころか、ドイツ文化政策の代表者たちも、直接的にせよ間接的にせよこの記念すべき機会に意見を述べ、そこで古代学に対する彼らの立場を精確に示すためにまた招かれていたように感じていたのであった。会議の組織と指導は、ドイツ帝国考古学研究所の手に握られ、その際一〔＊文部大臣〕ルストが、ヒトラーの名代で後援を引き受けており一、帝国文部省の支援を当てに出来たのであった。

開催者たちにとっては、会議をナチズム的学問の示威運動ならしめることは明らかに重要ではなかった。考古学研究所所長シェーデ（Schede）が、会議のテーマに関する彼の中間報告で、＜固有の初期及び先史ゲルマン史は、ローマの影響に接していない場合は、他の諸集会との重なりを避けるために除外される＞と注意していたように、この意図は、帝国文部省によって召集された記者会見で既に明らかになっていた⁽³⁸⁾。それに伴い、ライネルト（Reinert）と彼の取り巻きは、実際に追い返された。《帝国ドイツ先史連盟》（Reichsbund für Deutsche Vorgeschichte）の2回の集会を同時期に開催すると云うライネルトの決定は、考古学研究所との平和的な分業の方向には確かに向かわなかった⁽³⁹⁾。ライネルトとの高まる緊張関係を背景にして、考古学者たちにとっては、会議は、自らの地位

を高めるための歓迎されなくてはならない機会だっただろう。党の代表者たちは、大会報告から見て取れるように、平生はまた表に立たなかった。親衛隊全国指導者〔*ヒムラー〕は、ドイツ考古学研究所ローマ国外支部の副支部長ジークフリート・フックス（Siegfried Fuchs）によって公的に代表されていたことは、公式の会議報告とか日刊新聞ではなく、一年後ではあるがドイツ考古学研究所の年報で知ることが出来たのであった。⁽⁴⁰⁾ ローゼンベルクの〈学術局〉からの、恐らく一人の観察者の役目と思われるヴォルフガンク・エルクスレーベンもまた、参加者名簿によって推論すれば単に私人として扱われていた。帝国研究所の所長であるヴァルター・フランク自身、〈学術研究機関〉の代表者たちの下では現われていなかった。⁽⁴¹⁾ この名誉は、〈アドルフ・ヒトラー学校〉を代表していた古典考古学者、博士オットー・ヴィルヘルム・フォン・ヴァカノ（Dr. Otto-Wilhelm v. Vacano）に授けられたに過ぎない。⁽⁴²⁾

この催しの国際的な性格を考慮し、ルストはその開会演説で古代についてのナチズム的議論を強調し、余りにもはっきりと響かせることを明確に避けたのであった。文部大臣〔*ルスト〕は、〈古典古代学研究の地平〉の輪郭を述べ、そこには、古代史の全時代と全領域—古代オリエントも—が含まれていた。⁽⁴³⁾ もちろん、ルストも、北欧諸民族に執着していたのであり、彼らは、〈太陽に焦れ、土地を探し求め、南の地域に溢れかえり、何はさておき表面的には荒廃させるが、しかし彼らの新鮮な血と彼らの粘り強い精神で、新たな繁栄への必要条件を生み出したのであった〉。他方で、彼は、ローマーゲルマン論争を確かに〈深い国民的な関心を持って〉追っていたが、しかしにもかかわらず、この場で〈ローマ問題〉の解説を試みる誘惑には駆られなかった。⁽⁴⁴⁾ 彼は、〈ドイツ古代研究の偉大な伝統と、古代の人間形成的価値の信奉に忠実に留まっているドイツの国家指導部の〉意思を、最後に言明していた。⁽⁴⁵⁾

ベルリンでドイツの側からなされた若干の古代史の講演も、この場はナチズムの古代学の誘示（Heerschau）が問題ではなかったと云う全体的印象を裏書きしていた。⁽⁴⁶⁾ そのことの疑い得ない証拠を、特有のナチズム的な評価、ないし公式の路線からのズレを当然のように強く際立たせていた *Völkischer Beobachter*（=VB）の報告が提供していた。⁽⁴⁷⁾ ルストの綱領的な解説を無視して、—ここでは、取り分けローマーゲルマン論争への〈国民的関心〉に関する一文が取り上げられ

ていたが—VB の記者は、彼らの古代史像は、めったに確証されないことを認めていた。⁽⁴⁸⁾『アーリア的初期地中海史にとっての革命的意義について』は、考古学者ラインハルト・ヘルビツヒ (Reinhard Herbig) の『ドーリア人とペリシテ人』⁽⁴⁹⁾のほぼ解説であった。ヘルビツヒは、言語学者ハンス・クラエ (Hans Krahe) のペリシテ人のイルリア地方の支配と云うテーゼを、⁽⁵⁰⁾〈純粹に史料の考察領域〉から裏付けることを試みていた。VB では、このことは単にインドゲルマン問題への寄与と評価されていただけではなく、取り分けヘルビツヒを超えて、〈民族性の擬人化としてのゴリアテの姿で、インドゲルマン種族であるペリシテ人が、ユダヤ民族に立ち向かっていたのである〉⁽⁵¹⁾と書き留めていた。

《起源問題》に対する関心が、『ヘラスとエジプト人』と云う報告をしたミュンスター大学の古代史家ハンス・エリッヒ・シュティア (Hans Erich Stier) へ辛口の批判を起こさせたのであった。「逸れて」 (Ein Schritt vom Wege) と云うコラム・タイトルで、〈ギリシア古典へのエジプト文明の影響の箴言的かつ一面的な誇張〉⁽⁵²⁾に対して、その批判者は抗議をしていた。シュティアが、彼の恩師エドゥアルト・マイアーを手本にして真剣になすべく求めたことは、〈エジプト芸術の中に、奇妙な《異民族》の奇妙なスタイル、珍奇さを見るのではなく、《ギリシア以前の創造物の基本線が確かに古典的と呼ばれ得る純粹さで強調されている》⁽⁵³⁾芸術を見ること〉であった。シュティアが基本的には世界史叙述に対する意見の表明 (Plädoyer) を行い、そうすることで、ヴァルター・オットーとヘルムート・ベルフェの間で燃え上がった論争に介入したことを、VB の批判者は見落としてしまったように見える。⁽⁵⁴⁾

その報告者にとっては、ギリシアの古典芸術は、飽くまでも〈民族の独自の創造物〉であった。VB の意見によれば、〈この不滅の成果の背景と原因に対する問いを解明する〉と云うシュティアの考察は、〈ギリシア人は、いずれにせよ、インドゲルマン人であり、言い換えれば、彼らの指導層においては北欧人種であり、そして彼らの故郷は中部ドイツに、つまり北欧生活圏内にあり、そのことは、ローマの〔*ドイツ帝国考古学研究所支部の〕ジークフリート・フックスが論理的に証明したこと〉であって、〈これらの事実〉⁽⁵⁵⁾を見過ごしてしまっていると云うだけで破産していたのであった。VB のシュティアの批判者、ヨアヒム・ベネッケ (Joachim Benecke) は、ライネルトの博士課程在籍者であり、この種の攻

撃のため最良の前提条件を持ち合わせていた。彼は、既に1936年 VB でマールブルク大学の先史学者ゲロ・フォン・メルハルト (Gero von Merhart) を批判するキャンペーンを指導し、それは、1940年にゲロの強制的な年金付き退職を以て終わったのであった。⁽⁵⁶⁾〔*コラム〕「逸れて」でのシュティアの攻撃は確かに鋭さを欠き、フォン・メルハルトに対する誹謗中傷のような結果にはならなかった。シュティアの論稿は、会議直後、彼自身によって編集されていた *Welt als Geschichte* に掲載され、⁽⁵⁷⁾修正されずに、それは会議記録集に転載されたが、ここでは、エルンスト・キルシュテン (Ernst Kirsten) が、彼は、＜一面的ではあるが、オリエント的視点から・・・ギリシア芸術の不滅性への歩みを明らかにした＞と、⁽⁵⁸⁾もちろん認めていた。ところで、VB の南ドイツ版の読者たちには知らされないままであったが、その講演の翌日には既に現われていたライネルトの弟子の論評のことを、⁽⁵⁹⁾会議の参加者たちは詳しく知っていたであろう。

当初から、ライネルトの先史時代史集会 (Vorgeschichtstagung) についての報告は、VB のコラムにおいて考古学会議に関する報告とほぼ同程度のスペースを求めていた。⁽⁶⁰⁾ここに生じた緊張関係を、ヨアヒム・ベネッケは、自らのやり方で、その結論的論稿『調査研究と古代—古代ヨーロッパ学術調査へのドイツの関与』で克服しようと試みた。その際に＜北欧や中部ヨーロッパに埋もれている文化遺産は、同様の広範な議論の場を考古学会議では見い出さなかった・・・点に関して、スカンジナビアの会議参加者が訝しさを表明していたその所感、その吃驚させられた彼の所感＞に、⁽⁶¹⁾彼は関連させたのである。考古学者たちは、現状において、その点に何故全く関心を持つことが出来なかったのかと云う問いは、既に考古学会議に対するベネッケの論稿自体にその答えを受け取っていたのである。ベネッケ自身、一方で、＜もちろん、独自の帝国ドイツ先史研究所 (Reichsinstitut für deutschen Vorgeschichte) 創設と云うナチズム的要求の内に在った二つの研究部門の分離＞を意義あるものと見ていた。他方で、＜益々はっきりと、血縁的に与えられた空間 (der blutsmäßig gebende Raum)、換言すれば、ヨーロッパ古代のほとんどあらゆる文化創造的諸民族の始原の地は、北欧にあり、シェール (Scheel) が呼んだように《北欧の地中海》であるバルト海にあり、南欧は、ただ北欧で成長した人種の活力を、強力な政治的展開と最終的な文化的成熟に至らしめたに過ぎない＞と、彼は感じていたのであった。

彼は、ヘルビッヒやフックスの報告にその印象の根拠を置いていたのであるが、考古学の昨今の発展は、＜諸国民と諸文化の歴史的根源を北欧世界の内に逆に辿り、先史学者の諸成果を考古学者たちの仕事の前提と認めること＞を迫っていたのだ⁽⁶²⁾。ベネッケは、正にこうした動きの理論家たちが、二つの専門の協力を不可能にされたことをほとんど分かっていなかったであろう。ドイツの大学に最初の先史学講座を設置し、それと共にゲロ・フォン・メルハルトの招聘に成功したのは、古典考古学者のパウル・ヤコブシュタール (Paul Jacobsthal) であった。しかし、二人の学者は彼らの仕事を続けることをナチス主義者たちによって拒まれ、そのことにはベネッケも一役買っていたのである。⁽⁶³⁾

ちょうど＜民族的・生物学的起源の調査＞に考古学は取り組もうとしている、その点を確認し得るとベネッケは信じていたとしても、ベルリン考古学会議の経過の中では、一彼自身の報告が示していたが全くその点の確証を見出すことを、彼は出来なかった。＜《金髪で縮れ毛のアカイア人》について語っていたホメロスにおける人種学的視点に関するギュンターの確信、或いはヴィルヘルム・ヴェーバーのローマ帝政史の人種生物学的な根本的解明に、考古学は、考古学研究の今後の新たな歩みのための転機や道標を負っているのだ＞と云う＜正に、古代学研究にとって真に決定的な＞認識は、その時まで国内のレベルでも、国際的レベルでもその意義を認められていなかった。国際的な考古学会議以前に、もしもベネッケが、＜北西ドイツ地方の石器時代晩期の村・・・南部オルデンブルクのデュンマーゼー (Dümmersee) での、ナチス党帝国先史時代史局 (Reichsamt für Vorgeschichte der NSDAP) の発掘作業を、トロイアII市を伴う小アジアのヒサルリクの丘陵と同じ世界史的な出来事である＞と確信的に示していたとすれば、確実に良くて大笑いを巻き起こしたことであろう。この度を超えた主張は、たとえ現代の読者たちからは頭を振る以外にほとんど何も得るものはないにしても、ライネルトと彼の弟子たちが古代学研究に積み込んだイデオロギー的お荷物、つまるところ古代学に甚大な損害を与えたことを忘れるべきではない。

ベルリンでの会議は、戦争の勃発によって予定より早く終了した。取り止めたになった予定項目には、＜古代の大砲で《鋭い砲撃》が行われる手筈であった＞ザールブルクの訪問が入っていた。⁽⁶⁴⁾ 会議終了の際には、直ちに現代の武器が語られた

のであろうと推測され得る。状況を適切に判断し、〈空爆から考古学的記念物を保護することの国際法的承認のために・・・尽力する〉と云う決議が採決されたのであった。⁽⁶⁶⁾

第2節 ナチス大学教員同盟の〈合宿活動〉

〈旧弊な会議〉から意識的に抜け出るために、第三帝国では、〈合宿〉⁽⁶⁷⁾ (Lager) が新しい学問的な活動形態と宣伝された。この制度と共に、ナチズム的な共同体イデオロギー (Gemeinschaftsideologie) が、学問分野でその独自の表現を見出したのであった。以下で扱われる古代学の専門合宿 (Fachlager) は、いわゆる〈講師合宿、或いは教授資格取得合宿〉⁽⁶⁸⁾ (Dozenten-oder Habitationslager) と混同されてはならない。どうやら1938年まで行われたらしい、帝国文部省によって種々の学部から集められた学問的な後継者たちのための後者では4週間のコースが必要であった。教員職の免許は、こうした合宿の結果的な〈合格〉と結びついていた。その場合、彼らの夫々の専門分野の誰にでも分かる講義をしなければならなかった参加者の世界観的な適格性もまた、調査されねばならなかったことは当然であった。⁽⁶⁹⁾ エルンスト・ノルテによれば、〈この合宿の雰囲気は・・・、理想主義と日和見主義、それに秘めたる敵意等々の絡まってほとんど解けない混在によって規定されていた〉⁽⁷⁰⁾。この点では、〈講師合宿〉と〈専門合宿〉は、もちろん比較可能である。アルフレート・ボイムラーは、合宿の考えを既に比較的早く、典型的なほとんど式文である『男性結社と学問』で明かしていた。また更に、ボイムラーにとって、〈バッハオーフェンとニーチェによるその起源は一致し、ギリシア人の生の姿がその目印〉⁽⁷¹⁾ であった。古典文献学者ハンス・オッペルマンは、ボイムラーよりもなおいっそう明白に、〈学問的共同体活動〉 (Wissenschaftliche Gemeinschaftsarbeit) と一その正に完成した形態としての—プラトン・アカデミーを継承するものとして、〈合宿〉を持ち出していた。この活動様式で、ナチズム的学問は、〈新たな時代への出発〉を遂行したのである。オッペルマンは意識的であった、即ち〈暗闇の中を歩む際には、間違った道とか誤った方向への歩みなしには進めない。しかし、正にここで、共同体が新たに手を差し伸べる・・・そして、たとえ我われが夫々に別れても、たとえ完成した成果も、論文や書籍も家に携行しては行けない—ひょっとして、

あの日我われの内に形成し始めたそうしたものの様ざまのプランも、新たな認識の見取り図も持っては行けないとしても。しかし、我われは、この種の学問的共同体だけが与え得る大きな幸福に与るのである。それは、戦いの隊列に組み込まれていることを知り、自ら戦闘の備えをしている前線の兵士だけが知っている幸せな知覚である⁽⁷²⁾と。オッペルマンは、学術合宿（Wissenschaftslager）と、＜党が催す、一定の範囲の一定の人々のために、一定の学説の一定の課題に対し開発され、創設され、伝えられて来た教育訓練合宿（Schulungslager）＞の間に鋭い分離線を引いていた。しかしながら、最終的には、こうした境界は多分再び破棄されてしまった。＜我われは、今一度プラトンを思い起こす。アカデミーの共同体は、真の政治的な意志が学問の領域で明らかにされることを認めていた形態であったように、現代では、学術合宿が学問的生の形態であって、そこでは、人のこころを燃え上がらせる政治の火花が研究者に燃え移り、彼の働きを我が民族の偉大な覚醒に組み込む⁽⁷³⁾＞のであった。

ヴェルツブルクにおける古代学専門家たちの＜合宿＞は、一国家的な範囲との関連では一＜1933年以来の古代学の最初の集まり＞として、ナチス大学教員同盟全国指導部によって召集された⁽⁷⁴⁾。その頂点には、公式には、大学教員同盟の＜学術局＞の長グスタフ・ボルガー（Gustav Borger）が立っていたが、専門的指導は、ゲティンゲン大学のラテン学者ハンス・ドレクスラー（Hans Drexler）⁽⁷⁵⁾が担当していた。こうした専門学者たちの活動形態に対する大学教員同盟の責任は明確ではなかった。ヴェルツブルクの催しの場合、大学教員同盟による自身の管理で実施された最新の＜合宿＞であることが、恐らく重要であった。

それが終了して数日経て、ナチス大学教員同盟指導者シュルツは、〔＊党官房長〕ボルマンから、ローゼンベルクが、＜その学術集会と大学教員同盟の他の催し物に関して報告されるよう＞に望んでいると云う通知を受け取った⁽⁷⁶⁾。シュルツは、直ぐに作成したローゼンベルク宛書簡で、彼は、この件をこれまで全国指導者〔＊ローゼンベルク〕が望んでいるとは全く知らなかったために怠ってしまったと断言していた。それどころか、彼は、全国指導者〔＊ローゼンベルク〕のかかなり以前の言葉に基づいて、それで個々に＜事前に連絡しなくても、私の合宿の仕事を完全に承知している＞ものと推察し得ると信じていたのであった。彼自身がここでその振りをしようとしているように、シュルツが全く予想していなかった

ことは恐らくなかったであろう。彼が今や、次の点に最も重点を置いたのは偶然ではなかった。＜貴殿ご自身、個人的に私どもの活動について納得されておられますし、更に、全く事実を知らないために、私どもがいつも非難されていますこと、即ち、大学教員同盟は、『世界観研究、或いは学問研究を押し進める』気がないと、そのことも、貴殿ご自身お分かりになっておられます＞。ナチス大学教員同盟の合宿で、はっきりしているのは、＜ナチス主義者として、相互批判の中で個々の基本的な学問的諸問題をはっきり知るために、大、小の専門領域の、むしろえり抜きのナチス主義の学者たちが集っております。もちろん、ここに結果として、大学での個々の研究―学問活動に具体化されます相互的な成熟、純化、それに方向づけが生まれるのであります＞と云うことであった。シュルツは、更に＜今日、帝国研究評議会（Reichsforschungsrat）の委任を受けた党員リッターブッシュ（Ritterbusch）が、それを直ちに為すために、政治的に濃淡を持っているあらゆる学者たちを、彼らの世界観的な態度を斟酌もせずに集めましたようには評判になっておりませんが、この合宿活動は、党の監視の下に行われますことがもちろん絶対必要なことであります＞と考えていた。加えて、シュルツは、《精神科学の戦時動員》を学術政策の第二戦線とあて擦っていたが、なお指摘され得るように、別の指導者の下で古代学の一部も戦時動員に加わったのであった。結局、シュルツは、ヴェルツブルク合宿に関して、その当時既にローゼンベルクの＜大学＞（Hohe Schule）の対外部署を指導していたハルダー教授から全国指導者〔*ローゼンベルク〕に報告してもらうように任せたのであった。⁽⁷⁷⁾

〔*党官房長〕ボルマンの支持のお陰で、ローゼンベルクは、1941年の終わりにまでに、ナチス大学教員同盟に対して、《強化訓練権限》（Schulungsvollmachten）をめぐ⁽⁷⁸⁾る戦いに勝利した。1942年6月、アウグスブルクで開催された古代学の次の＜合宿＞は、〔*ローゼンベルク当局の〕＜学術監視・評価課＞によって準備されただけでなく、ローゼンベルク一門（das Haus Rosenberg）の3人の＜前途有望な＞新進の学者たちの参加もまた歓待することが出来たのであった。⁽⁷⁹⁾ 1年前、ヴェルツブルクではその反対であって、グスタフ・ボルガーの出席はず⁽⁸⁰⁾と滞在中も無視されていた。ヴェルツブルク＜合宿＞の準備に関して、議事録風に書かれた『記録』は、僅かなことしか述べていない。貶された＜旧弊の会議＞については、＜合宿＞外の慣例に関することで説明は難しい。ドレクスラーは、

ホテルの滞在を、＜戦争状況によって制約された当座しのぎ＞と感じていた。彼は、＜どちらかと言えば、この宿では、シュールンクスブルク (Schulungsburg) の極めて重要な人物＞のようであつたらしい⁽⁸¹⁾。しかしながらまた、＜彼らの間で、ナチズムの態度が最早議論の対象とならないような者たちだけが招待され（得）た＞と云う選択基準に関わる彼の所感は、＜合宿＞のやり方に恐らく相応しくなかった。＜自由に意見を述べること＞が、＜許されていただけでなく、求められていた＞〔＊のだから〕。こうした集まりの言わば共通の基本的態度からは、いづれにせよ、何ら困難は生じ得なかったのであり、それ故に一ドレクスラーの序論の最後は一＜ナチズム的世界観は、決してドグマではなく明確である。それは知識に基づいている＞⁽⁸²⁾。最も多く割り振られていた参加者たちは16人の古典文献学者であり、5人の古代史家⁽⁸³⁾、3人の考古学者⁽⁸⁴⁾、2人のゲルマン学者⁽⁸⁵⁾、それに各1人のインドゲルマン学者と哲学者が続いた。これらの中に、言わば1933年以前に当局に認められた世代である7人の年長の専門代表者が数えられた⁽⁸⁶⁾。更に、官吏としての身分を持った20人の教授たちと、ただ一人の講師が招待を受け入れていた⁽⁸⁷⁾。ヒムラーの＜父祖の遺産・協会＞、或いはローゼンベルクの＜大学＞に加わっていたか、或いはこれらのグループと考えが似通っていた学者と同様に、帝国現代ドイツ史研究所の所員もそこに代表を出していた。特に関心を惹いたに違いないのは、ヘルムート・ベルフェもヴィルヘルム・ヴェーバーも夫々姿を見せなかった、或いは＜招待＞されていなかったことであつた。⁽⁸⁸⁾

集会の目的は、《ギリシアローマ世界の分野に関する新たな諸課題を明らかにすること》⁽⁸⁹⁾であつた。『いわゆる第三のフマニズム』と題されたハンス・ドレクスラーの序論的報告は、どちらかと言えば、確かに過去の克服に重きを置いていた。ドレクスラーは、1年後に著された彼の＜論難の書＞の原稿に基本的に拠っていた⁽⁹⁰⁾。彼に対して、取り分けヴォルフガング・シャードヴァルト (Wolfgang Schädewaldt) が応答し、彼の師であるイエーガーが、＜あの恐ろしく方向の見失われていた時代に、なお主流を占めていた実証主義的伝統に対して及ぼした＞＜全ての公にされたもの (Gesamterscheinung)＞とその強い影響力を指摘した。シャードヴァルトによると、イエーガーの影響は、＜《価値自由な》歴史学に再び価値を持ち込むことを求め、再び本質的なものを問う一人の人物が、彼に現れたのであつた。《学問に敵対するもの》と云う非難は、恐らくイエーガー

に対して起こせないであろうし、彼の学問的著作によっても誤っていることが証明される。彼の問いかけが、その当時、正に文献学に再び意義を付与したのであった⁽⁹²⁾、こうしたことに因っていた。シャーデヴァルトの論述に明らかであるイエーガーに対する慎重な公然たる信頼感は、リヒャルト・ハルダーの印象に従えば、〈イエーガーに対する独特の隔たり〉をはっきり見せていた討論において圧倒的に反論に遭遇したのであった⁽⁹³⁾。〈第三のフマニスム〉の問題は、1933年のエルンスト・クリークとヴェルナー・イエーガーの間の古代学に対する論争の後にも、一ここで明らかになるように一なお全く解決していなかったものであった⁽⁹⁴⁾。ヴェルナー・イエーガーとの対決は、先ずその続きを『ギリシア古典文献学の基本的な現代的諸課題』、及び『ギリシア文化の理論的理解と実存的経験』と云うテーマの講演と議論の中に、暗黙のうちに認められたのであった⁽⁹⁵⁾⁽⁹⁶⁾。

狭義のローマ分野を、一人ハンス・オッペルマンが、『ローマの運命とアウグストゥス時代』と云う報告で扱っていた。オッペルマンは、共和政末期の〈内部的病弊〉の徴候を、〈文学と政治的現実との損なわれた調和〉に認めていた。一方、〈アウグストゥス最良〉(Augusteer)のウェルギリウス、ホラティウス、それにリヴィウスの諸作品は、〈カエサル時代の墮落と腐敗に比べてローマ文化の健全さ〉を体現していた⁽⁹⁷⁾。オッペルマンのアウグストゥス時代に対する評価は、全般的に楽天的過ぎると感じられた。ロタール・ヴィッケルト (Lothar Wickert) は、このように表現していた—〈再発見されたアウグストゥス時代の健全性など問題にならない。何故なら、元首は奮い立たせるようなプログラムを持っておらず、また生物学的ローマは、当時あまり健全ではなかったのだから〉⁽⁹⁸⁾。ここで全ての局面が述べられ得る訳ではないが、この議論において、先ず第一に〈アウグストゥス時代の不健全さの問題〉(Problem des augusteischen Versagens)⁽⁹⁹⁾が、その他の発言者たちにも立ちはだかったのだった。

ヴィッケルトは、彼の異論と共に、フリッツ・シャッヘルマイヤーの『人種研究と古代研究』と云う基本報告に注意を向けるよう早く指摘をしていた⁽¹⁰⁰⁾。この論述は、それに続く討論も同様に、ここでかなり細かく注意を払う必要があるだろう。シャッヘルマイヤーは、古代の評価に関する決定を人種学の知識に従属させると云う彼の根本的覚悟を、なんと既に1933年に言明していたのであった。ギリシア文化との関係は、それが〈共通の血統 (gemeinsame Abstammung)〉、ひ

いては共通の遺伝的血縁関係 (gemeinsame Erb-verwandtschaft) 〉から説明される限り問題とはならなかった。

ヘレニズム時代や後期ローマにおける、〈我われの本能の警告からきつと異質なものと感じるに違いない様ざまの徴候に〉、シャッヘルマイヤーは既に踏み込んでいた。しかし、この場合、〈個々人の本能的確信において迷う際には、我われの同じ血縁性の境界を《学問的》方法で確定することが絶対必要で、人種研究の手を借りてのみ行うことが可能である〉ようにシャッヘルマイヤーには思われたのであった。古代研究者自身、もちろん先ず、こうした考えの下に統合された専門領域を〈概観する〉に至らなければならなかった。そのためには、〈何よりも《遺伝学》が利用されなければならなかったが、それは・・・自然科学的方法論を以って研究されている学であり、且つ実験を観察することが可能であることで、広範な正確な基盤を我われに提供するものである。我われが遺伝学から学ぶのは、メンデルの法則の枠内で、肉体的な素質並びに精神的素質の遺伝が生じること、また沢山の遺伝因子は、優性的特性か劣性的特性かいずれかの傾向があること、そのことは人種混淆にとって最も重大なこと等々である。更に、精神的、並びに肉体的素質に対しては、それらは、第一に環境の刺激によって活性化することが認められているのである〉。人類学の人種概念の定義は、未完成のようだった。しかしながら、歴史家にとっては、〈もちろん、人種を身心一体 (psychophysische Ganzheit) として捉えようと試みる人種概念だけが利用し得る〉のであった。シャッヘルマイヤーは、クラウス (L. F. Clauss) の〈批判が無くはない〉が、しかし利用可能な《人種心理学》 (Rassenseelenkunde) や〈ゴビノー (Gobineau) によって基礎が置かれ、取り分けチェンバレン (Chamberlain)、シェマン (Schemann)、そしてローゼンベルク等々によって継承された《世界観的—人種的文化考察》 (weltanschaulich-rassenmäßige Kulturbetrachtung) 〉をなお最後に挙げていた。〈我われは、自然科学から精神科学への人種思想の画期的な進出を彼らに負っているのである〉。古代学は、〈遺伝研究、並びに人種研究〉に対して、〈ただ学んで、受け取るだけの立場を決して取るべきではない〉。それどころか、古代学の〈主なる務めとは、先述された夫々の研究方向からは決して与えられ得ないそうした歴史的素材や証明可能なるものを提供すること〉⁽¹⁰¹⁾にあった。これ等の解説に続いて展開された《精神史

的人種研究体系》(Systematik einer geistesgeschichtlichen Rassenkunde)のために、シャッヘルマイヤーは、彼の既に1933年に出した声明と、その間に著された著作『歴史における生の正当性』を参照するように指摘していた。⁽¹⁰²⁾

彼の方法論の説明のために持ち出されて、キーワード的に扱われている〈歴史的に方向付けられた人種研究の個別的事例〉(Einzelbeispiele einer geschichtlich gerichteten Rassenforschung)が示しているように、理論的な要約部分の遠回しの言い方が予期させていたよりも、実際にはより容易く変更が生じていた。シャッヘルマイヤーは、以下のように〈北欧人種とインドゲルマン人〉の問題圏に歩み寄った。即ち、〈前提：インドゲルマン語は、我われに知られている人種の《一つ》に属している。問題提起：どの人種か？除外的研究法：北欧人種以外には全く他の人種は問題にならない。事例での吟味：古代とは関係なく、諸研究により確かめられる北欧的な心性(Nordische Geisteshaltung)は、実際ギリシア人の文化的所為(Kulturhaltung der Griechen)にもまた認められるのであり、しかも、その衰退の明白な徴候と徐々に人種的に分解していることは一致している〉。〈西-地中海人種〉の様ざまの痕跡を、クレタ島の発掘された頭骨やフレスコ画風描写―〈そこでの、母権的な傾向、抒情詩から血生臭い自然主義へのガリア風の飛躍、婦人、宮廷的なもの〉―に始まって、近代の〈西ヨーロッパ(スペイン、及びフランス宮廷、フランス風抒情詩と自然主義その他)〉に至るまで追跡することが可能であった。⁽¹⁰³⁾

〈北欧的な基本構成要素を持ったインドゲルマン人たち〉によって基礎が築かれたギリシア文化の〈脱北方化〉(Entnordung)が生じたのは、少なからず印象的であった。この場合、シャッヘルマイヤーが、ダレ(R. W. Darré)のスパルタの叙述が印象づけた動物飼育上の用語を利用していたのは全く見誤り得ないことであった。⁽¹⁰⁴⁾即ち、〈貴族階級の徐々になる選別除去と混血(Ausmerzung und Vermischung)、同じく裕福な重装歩兵階級の選別除去を史料によって確認すること。同様にまた、見分けられ得る暗く色素が沈着したもの(Pigmentierung)の増加。基層が圧倒的に西-地中海的であるが故に(フルスト[Fürst]やブライティンガー[Breitinger]の諸研究を参照)、徐々にまた、西方的傾向が増加していくこと。構成要素として、初めて5世紀に混入された(beigemischt)修辞法(上演スタイル)、無慈悲さ(ペロポネソス戦争)、しか

し、特にヘレニズム時代において（ヘレニズムに関しては、今日ではシュナイダー〔Schneider〕によって確認された傾向）＞。もちろん、東方における展開にも触れないわけにはいかなかった。「第二章」の東方、即ち、「ペルシア帝国とそれに続く全古代の時代について」では、＜不毛の地の諸要因が除去された後・・・西南アジア－アルメニア系人種（vorderasiatisch－armenoide）の構成要素が圧倒的に優勢になった；それで、寄生虫的順応（parasitäre Anpassung）、戦いを好まず、腐敗堕落している寄生虫（zersetzenden Parasiten）のような商人や知識人たちの地中海全領域への拡散、同じく精神的に腐敗しているイデオロギー（zergeistigender Ideologien）（禁欲他）の拡散＞。シャッヘルマイヤーは、この方法論そのものを以って、＜スタートに立っていること、スタートではあるが、重大なこと、即ち、生けるもの（Das Dasein）を、一方はただ物質的に、他方は観念的にしか捉えない二つの異なる考察方法に代わって、生（Leben）の両側面を、ある意味で《丸ごと全体》（die Ganzheitlichkeit）包括する新たな考察方法を築く必要がある＞と理解したのであった。⁽¹⁰⁵⁾

議論の過程で明白になったことは、シャッヘルマイヤーの同僚たちは、遺伝学的専門用語に惹きつけられるより、むしろ嫌悪を覚えていたことであった。＜遺伝素質＞（Erbmasse）と云う概念は、ドレクスラーに＜不適切な唯物論的前提である＞と云う感情をさっそく呼び覚ました。⁽¹⁰⁶⁾ シャッヘルマイヤーは、この領域では、その専攻から病理学者であった大学教員同盟の代表者〔＊ボルガー〕に、批判が決して無くはない対話相手を認めたに過ぎなかったが、ボルガーと＜染色体内部の・・・個々の遺伝因子の数値・・・、異なる培養基点の連合・・・＞等に関して、或いは＜潜伏型の表現型（Phänotyps）＞の概念を、彼は議論することが出来たのであった。この領域から方向を転じようとする努めが、＜遺伝素質の構造＞に対し問いかけているシャーデヴァルトの論議に明らかであるが、それは、この関連では挑発的に働いたに違いなかった。その記録では、シャーデヴァルトは、＜ヒポクラテスの《空気と風と土地について》22項における有名な箇所、即ち《全てのものは、同様に自然であり、同様に神祕的であるが、しかし夫々は自らの本性を持ち、その本性に従ってすべてのことが生起する》、言い換えれば、神祕的なものが、自然の法則に従って働いているに他ならない＞を指摘したと記されている。⁽¹⁰⁷⁾

リヒャルト・ハルダーもまた、＜個々の偉大な人物たちの人類学的なデータの評価＞の際の困難さを指摘し、批判的に意見表明をした。即ち、＜我われは、全く手頃な身体的な手掛かりになる点を持っていないのであるが、その理由は、肖像彫刻であれ、叙述であれ、いずれも測定するには十分ではないからなのである。・・・しかしまた更に、発掘された頭骨の測定は、基本的に平均値を明らかにし得るに過ぎない。歴史は、ただ平均的なものではなく、何よりも偉大なる人間を相手にしているのである。—インドゲルマン的なものを復元するに際して、立ち止まっていることは出来ないものであり、常に繰り返し個々の民族の文化創造に迫らなければならないのである＞。更に、ハルダーは、ナチス大学教員同盟の代表者ボルガーの賛同もまた認めたのであったが、身体的なものの甚だしい強調に対し警告を彼は発したのであった。＜我われにとって依然として重要であるのは、精神的なるもの（das Geisitige）である。古い昔の歴史の個別的な人間を価値評価する場合、身体的なものと精神的姿勢との間の知られ得る関連は、恐らく確認され得ないのである＞。ボルガーによれば、古代学は、取り分け＜精神的特徴の発達の標＞⁽¹⁰⁸⁾を探究する際には、人種学の助けになるべきだった。ハルダーと同様に、シャーデヴァルトは、この分野にも、文献学の出動の可能性を見ていた。＜性格学的解釈は、その熟成した方法論を以って実際に精神構造に踏み入る。その解釈は、また人種構造の確定のための傑出した手段でもある。その成果は、自然科学の純粋な数値と比べれば、恐らく正確さには劣るが、それだけ示唆に富んでいる＞⁽¹⁰⁹⁾。

シャッヘルマイヤーの意識では、フランツ・ミルトナーのみが逆の立場を代表していたに過ぎなかったが、彼は＜古代の精神的特性の輪郭を描く場合には、・・・身体的に確認されていることを無視しては＞⁽¹¹⁰⁾いけないし、更に＜あらゆる史料的材料を、・・・最後のものに至るまで考え抜くこと＞を求めたのであった。狭義の人種学的な、換言すれば遺伝生物学的基準を取り入れて行くと云うここに代表されている古代研究者の他と異なった構えは、グラーツ大学の考古学者ショーベル（Schober）の報告『考古学的史料の人種学的有効活用化の問題』に関する討論においてもまた明らかになった。⁽¹¹¹⁾ドレクスラーが確認していたように、何れにしろ、例えば＜クレターミュケーネ文明の人種学的理解＞と云う問題、或いは＜肖像彫刻の有効利用性＞⁽¹¹²⁾の問題がそこでは答えられないままになっていた。議

論が集中した後者の問題については、全く一致が得られなかった。その場合またもや、フランツ・ミルトナーが特別にファイトを示したのであった。彼は、〈ほぼ全てのローマの肖像彫刻の分析から・・・平均値に関する一定の手掛かり〉を期待させた。〈全部を扱うことが、一定の階層の変動のより大まかな洞察と新たな人種的要素の浸透を明らかにするに違いないだろう〉。ミルトナーの、取り分けドイツ帝国考古学研究所に向けられた、〈この研究に着手することの考古学者への提案〉は、言及されている多数派の専門代表者たちは、人種学的な研究に対して口先だけの信仰告白に止まっていることを十分に明らかにしていた。インスブルック大学の考古学者〔*ミルトナー〕は、この関連では、そのことにはまた立ち返るが、既に1938年以来ドイツ考古学研究所と特別な経験を積んでいた。⁽¹¹³⁾ 1941年1月のヴェルツブルク合宿での《人種学と古代研究》と云う全体的に絡み合った議論は、多くのものたちがこうした立場になお変わるであろうとの期待にはほとんど添っていなかった。

講演プログラムは、『ゲルマン人たちにおける視野と一体性』と云うミルトナー⁽¹¹⁴⁾の発表によって締め括られた。ゲルマン人の一体性意識の最も初期の痕跡を跡づけるミルトナーの研究は、僅かな発言要求から推論すれば、聴衆の関心を引かなかった。合宿の指導者ドレクスラーは、振り返って次のような印象を持ったのであった。即ち、合宿は、〈開会の辞の中に呼び出されていたその魔力を、我われにもまた証明したのだ〉と。ドレクスラーが、いかに強く主観的に《合宿－仲間同志理念》(Idee der Lager-Kameradschaft) によって貫かれていたかは、今後、教員配置の問題自体、〈我われの仲間意識によって、そこに完全に順応することによって解決する。嫉みは、その聖なる満足 (theios choros) には居場所が全くない。この問題を率直にお互いに調整することが、我われはどうして出来ないであろうか?〉と云う彼の提案が示していた。ドレクスラーは、これと対立する姿を会議と云う〈招聘取引所〉(Berufungsbörse) に見ていた。彼は、この点では非常に真実に近く、〈高級官僚たちが、互いに利益を分け合うことを意識している悪しき行為〉⁽¹¹⁵⁾について語っていた。ドレクスラーが、そのことに関与していなくてはなかった〈学術監視・評価課〉の専門的評価の実際は、もちろん全体的に、先に指摘されたような〈仲間同志的な〉姿を余り伝えてはいなかったが、－〔*この点は〕ドレクスラーが、彼の職能階級の可変能力 (Wandlungs-

fähigkeit) を確信していたことを排除するものではなかった。フューラーの実例自体、＜全てのものが、既に哀れな状況と腐敗とに甘んじていた正にそこで、不可能なるものを可能たらしめた⁽¹¹⁶⁾＞のであった。

古代学の専門合宿のその後の経過については、ヴェルツブルクで開催された合宿に関する詳細な記録に匹敵する資料が、全く提示されていない。そのために、＜ローゼンベルク当局＞の記録類が限定された範囲であるが、合宿活動の舞台裏に目を向けることを可能にしている。ドレクスラーによって描かれた古代学者たちの徒党を組む仲間同志の光景を修正するような資料は役立つ。アウグスブルク合宿の準備の際には、既に述べたように、ローゼンベルク〔*当局〕の＜学術監視・評価課＞が入れられていた。ナチス大学教員同盟の委託でドレクスラーが立案したプログラムは、ナチス大学教員同盟指導部によって、何よりも先ずローゼンベルク事務局に伝えられねばならなかった。その点に関して、ドレクスラーは、〔*学術監視・評価課長〕エルクスレーベンから彼の事務局に協議を求められた。その後に漸く、全国指導者〔*ローゼンベルク〕の名代でヘルトゥレが、＜古代学の合宿のためのプラン、主題、それに指導者の人物を了承したこと＞を発表した。⁽¹¹⁷⁾同時に、彼が大学教員同盟に要請したのは、エルクスレーベンと並んで〔*ローゼンベルク当局の〕学術本局の評価判定者仲間⁽¹¹⁸⁾に属していたDr. ハンス・グリューネヴァルト (Hans Grünewald) も合宿に招待することであった。ローゼンベルクの代理人は、合宿に参加が許される者たちについての最終的な決定は留保した。当初は、＜問題の次世代の全ての学者たち＞が招待されていたのだが、しかし時局のせいで、かなり多数の断りが予期されていた。⁽¹¹⁹⁾ヴェルツブルクの場合に既にそうあったよりも範囲を広げ、今回は後進の者たちをいっそう顧慮しようとした。一連のそれらの者たちは、記されてはいないが、かなりな数だった。《古代学の戦時動員の指導者》たるヘルムート・ベルフェが招待されていなかったことは、容易に納得がゆく。招待されなかったと云う事実から、当該の者たちのナチス大学教員同盟、或いは＜ローゼンベルク当局＞との協働準備作業の欠如があらゆる場合に推論され得るわけでは決してない。合宿に先立ち、ヴィルヘルム・ヴェーバーの参加をめぐって評価判定者の本格的な争いが起こった。取り分け、リヒャルト・ハルダーが彼に反対したが、その理由は、彼にはヴェーバーと一緒に仲間同志的仕事 (kameradschaftliches Arbeiten) をすることは全く不

可能なように思えたためであった。アウグスブルク合宿の講演者に入っていたハルダーは、いかなる場合にも、彼は、ヴェーバーと一緒に合宿に参加しないだろうと声明を出した。⁽¹²¹⁾＜合宿にヴェーバー教授を場合によって招待するかの問題、その様ざまの仕事から、彼が特に密接な関係を持っている合宿の専門的テーマとか合宿の基本的な催しに招待するかの問題＞は、＜ローゼンベルク当局＞によって決定されるべきであった。ヘルトゥレは、本来の主催者である大学教員同盟に結果を報告することを約束した。⁽¹²²⁾結局、ヴェーバーは、最終的な参加者リストが示しているように合宿には参加しなかった。⁽¹²³⁾

ヴェーバーの排除後にも、アウグスブルク合宿の構成は、専門代表者や、ローゼンベルクの信奉者に論争の機会を十分に提供していた。ドレクスラーは、彼の「フマニスムス - 本」(Humanismus-Buch) に対する反応から、今回は、ヴェルツブルクにおけるよりも和やかには進行しないであろうと既に事前に予測し得ると信じていた。この印象を、彼は、＜ローゼンベルク当局＞にも伝えていた。＜そうこうする内に、別の側で最初の動きが明らかになり、その興奮は合宿にも大きな波紋を投げ掛けるかのようにほとんど思えるのである。今や既に、私の論稿を合宿で議論の対象にすることが二度申し込まれている＞。ドレクスラーはこの強要を決して拒もうとはしなかったが、一方で、ヴェルツブルクの論争の再来を避けたかった。⁽¹²⁴⁾その正確な文言は、＜父祖の遺産・協会＞一会員の無名氏の報告から分かるに過ぎないが、『ギリシア文学における文化と政治』と云う最終的
主題は、それ自体十分な対話の糸口を示していた。⁽¹²⁵⁾事前に明らかになっていて、ただ一般的に表現がなされていた《全体テーマ》には、主催者の意向によれば＜《文化》と政治史は内的に一体である、そしてこの自然な一体性の解体が国民生活の攪乱の標である＞と云う思考が根底をなしていた。特に標的にされたのは次の点であった。即ち、＜現代の学問のある種の見方を克服すること。文献学と考古学では、政治史に対する無関心な態度、光景。政治的な出来事こそが、精神的並びに芸術的世界の土台であろうし、そのみが真の存在に相応しいであろう。歴史では、文化的事象を方法論と歴史の説明に組み入れられる補足と云う形で扱うこと＞、＜政治の主導性についてのナチズムのテーゼを通じて＞、指摘された軌轢が克服され、＜このテーゼを、歴史的見方においても、また学問的議論においても同様にきわめて明白に唱えること等々が合宿の固有の課題であるだろう＞。⁽¹²⁶⁾

個々の講演は、ただ緩い結びつきではあるが、ほとんどこのテーマの枠内に即していた。コンラート・グラザー (Konrad Glaser) の『国家指導者と文化創造者』と云う開会報告が、多分その課題に一番近かった。その他の講演題目は、『ギリシアの伝承における口承性と文章性』(R. Harder)、『新しいアリストテレス像』(F. Dirlmeier)、『ローマの詩人エンニウス』(H. Oppermann)、『ギリシアの国内法文書とローマ元首政治の国家的実践』(L. Wickert)、『古代の戦勝記念碑』(R. Herbig)、それに『南部ロシアにおけるスキタイ人とゴート人』(F. Altheim⁽¹²⁷⁾)。＜父祖の遺産・協会＞の報告者の印象によれば、要するに、会議と同様プログラムには＜統一の方針＞が欠けていた。＜文化＞とか＜政治＞の概念を人はよく飲み込めなかったのであるが、それは、取り分け＜一連の講演が、・・・その点に全く顧慮を払わず・・・、3日目、インスブルック大学の学長シュタインアッカーが、文化に関してはこれまで十分に聞いてきたが、政治に関しては、人々は何にも聞いていないと論争的に発言をして、大会の全てが失敗に帰す危機に瀕した＞ためであった。ドレクスラーは、合宿の指導者としての自らの役目にとって必要な沈着さを明らかに欠いていたが、＜彼は、元来信仰深いプロテスタント（ヘルンフト派）であり、今ではナチス大学教員同盟において、換言すれば、暫く前からローゼンベルク当局によって強く影響を受けている大学教員同盟において指導的役割を果たしている⁽¹²⁸⁾＞と、無名氏は明らかにしていた。更に、一連のドイツの正教授や講師たちのこの集まりが、＜言わば、討論には何らの貢献もせず、それどころか、まるで監視しているも同然に振る舞う《ローゼンベルク当局》の3人の権力者の監督下で催されていたことが、《父祖の遺産・協会》一会員をいやな気分＞にさせていたのであった。更に、ローゼンベルクの代理人たちは、＜付け加えれば、学問的には全く無名であって、もしも私が実際に教えていたならば、教授資格を取得しなかったであろう＞と、記録者の傷つけられた身分上の体面をここでもまた語っていた。＜ローゼンベルク当局＞と密接に結ばれていたリヒルト・ハルダー自身、全国指導者〔＊ローゼンベルク〕は、＜大学教員同盟の集会〔＊＝合宿〕の彼の評価を示すために、より高い地位の代理人を派遣しなかった＞と表向き失望し、その点について意見を述べていた。⁽¹²⁹⁾＜合宿＞理念の弱々しい残影はなお残っていた。＜最も重要なことは、そのように沢山の専門的な同じ方向を目指す学者たちが集まることであった。個々人の討論におい

て、多くの刺激と良き結果を生じたのであった>と<父祖の遺産・協会>の報告は閉じていた。⁽¹³⁰⁾

ローゼンベルクの強力な派遣団の3人の構成員の一人が、集会の終り際に、ともかく根本的な討論に寄与しようとした。半時間の講演時間が経っても、なお相変わらず問題提起に彼が至らなかった時、その間に大学教員同盟委員長のシュルツが姿を現わしていたため、ドレクスラーは、若干の説明をした後、もちろん彼に発言を封じなければならなかった。⁽¹³¹⁾<ローゼンベルク当局>では、その出来事は、《クレムト事件》(Fall Klemmt)に高められ、その上ドレクスラーは全国指導者〔*ローゼンベルク〕に送る詳しい報告書を求められた。その<当局>の〔*学術〕本局の長(Hauptamtsleiter)ヘルトゥレは、<この事実報告>を以って、<関心を持っている側>から申し立てられた、<党员であるDr. クレムトは、古代学の大学教員同盟集会で不首尾が生じ、発言を封じられねばならなかった>と云う主張に反駁し得ることを期待したのであった。⁽¹³²⁾経過は、詳しくはこれ以上ははっきりしていない。ドレクスラーは、大学教員同盟委員長が彼の介入処置に対して影響力を及ぼしたと云う非難に対して、つまり自己弁護をしたのである。クレムトの詳論の中断を全般的に人々が遺憾に思っていたと云うエルクスレーベンの印象は、一この点で、ドレクスラーの報告書は、真実に最も近いものであったろうが―<ことによると全ての参加者にとってではないにしても、事実に>合致していたのである。⁽¹³³⁾

<ローゼンベルク当局>の人々には、明らかに、アウグスブルク集会と最良の記憶は結び付いていなかった。にもかかわらず、ハンス・グリュネヴァルトは、<アウグスブルク合宿の反対派>について回顧的に語っていたに過ぎない。⁽¹³⁴⁾その背後に、どのような一派が隠れていたのかが、1942年10月に開催された《ゼーフェルト(Seefeld, チロル)古代学後継者合宿》についてのグリュネヴァルトの報告書から間接的に読みとれる。⁽¹³⁵⁾その集会で、<一般に期待されていたように、ギリシア哲学、特にプラトンないしアリストテレスに関して論じるのが当然であった>マールブルク大学の古典ギリシア学者ミュラー(F. Müller)は<大学からフマニズムを駆逐してしまったナチズムに対する攻撃・・・>を始めたのであった。ミュラーは、その点をドレクスラーの論争的文書に対する鋭い攻撃と結び付けただけではなく、<インドゲルマン主義的立場から古代学を論ずることに対し

て、全精力を傾けて反論したのであった。それに代わって古代学でなされるべきことは、ヴェルナー・イエーガーのそれ、・・・放棄されたフマニズムス理念と人間形成理念に他ならないのであった⁽¹³⁶⁾。ミュラーの批判は、更に彼がグリューネヴァルトに対しても、＜我われの青年たちは、どうして政治的、並びに世界観的教育訓練に愛想を尽かすようになったのか＞と公然と表明したとき、遂に専門領域を超えてしまった。ミュラーの論稿が、グリューネヴァルトにも激しいセンセーションを巻き起こしたことは確かに信じてよい。＜国防軍の任務に就いた合宿参加者たちは、この報告の間中彼らの隣のものに、どうしてこんなことが未だ可能なのかを尋ねたのであった＞。＜ミュラーは、彼の説明の根拠を適切に述べるのが全く出来なかったので、彼は、アウグスブルク合宿に参加しなかった反対派によって前もって送られて来たのだ、と云う見方も否定されない＞等とグリューネヴァルトが、詳しく報告しているように—その議論は生んだのであった。

ミュラーの演説は、全く直接的な成果は何もなかった。講演者に対して発言が封じられなかったのを、グリューネヴァルトは、ただドレクスラーの＜寛容な気質＞の所為にしていた。しかし何か別の理由から、＜取り分け、最近のミュラーの動向を非常に仔細に＞調べることが、グリューネヴァルトに指示されたのであったが、グリューネヴァルトは、マールブルク大学のプラトンについての教授資格取得論文が、様ざまの議論を以って古典ギリシア学者によって拒絶され、＜そこで活躍している世界観的傾向の研究方向を取っていた学派による承認が至って容易に推測出来たベルリン大学で、別のプラトーン研究 (eine andere Platon-Arbeit) に対して〔＊教授資格取得付与が〕申し出られた⁽¹³⁷⁾＞のであった。ベルリン・プラトーン研究 (Die Berliner Platon-Arbeit) は、遅くとも1940年、ベルリン大学にグリューネヴァルト以外誰も提出していない。彼の＜教授資格取得の師＞であるボイムラーによって、ゼーフェルト合宿の少し前に、＜シャーデヴァルトがベルリン大学の教授団に加わった後に、当初から存在していた対立状況が尖鋭化した＞と、彼は報告を受けていた。＜最も著名なドイツ古典ギリシア学者の所説に逆らって、学部教授団は、プラトーン研究〔＊への教授資格取得付与〕を決して承認しないであろう＞。ボイムラーは、他にもこの関連で—ここに記せば—＜学部教授団を屈服させる＞どんな方法も存在しないし、＜こうした方向でのどんな試み⁽¹³⁸⁾＞もきっぱりと拒んでいると強調していた。ゼーフェルト合宿への

ミュラーの参加、ベルリン大学の教授資格取得経過、それに＜アウグスブルク合宿の反対派＞、これらの間のグリューネヴァルトが形成していた関係は、ポイムラーのシャーデヴァルトの示唆によって間接的に確認される。

シャーデヴァルトは、アウグスブルク合宿の参加者に加えられなかっただけではなく、ヴェルツブルク合宿でイエーガーの地位を弁護したことで既に知られていた。後継者合宿に関する報告で、グリューネヴァルトは、他の関連でもまた、具合の悪い＜アウグスブルクの反対派＞の姿を完全なものに仕上げていた。ゼーフェルト合宿に代表された＜若者たち＞は、＜古代学の純粋にフマニスム的な代表者たちとは全く異なる立場＞を大半が示していた。＜古代学の《大家たち》は、出席していなかったので、・・・若者たちは、あれこれの実力者の不興を被ることを恐れなければならないこともなく、かなり自由に発言することが可能であった＞⁽¹³⁹⁾。若者世代の考え方がたとえどのようなものであれ、ミュラーの新たな批判は、古代学のフマニスム問題はナチズムの意味では未だに片付けられてはいないことを明白にしていた。こうした方向での新たなスタートが、後の後進者合宿でなされるはずであり、その合宿では、この複雑な問題が根本的に議論に付されようとしていた。⁽¹⁴⁰⁾要するに、合宿は、一グリューネヴァルトのこの考察が、特に明確化させるのに有用であるが―＜我われ研究者たちに対する長期の兵役生活の破壊的な影響の比較可能性を提示していたのであり、・・・一連の者たちは・・・彼らの研究報告において上手に説明していなかったが、しかし彼らの公にされた研究を知る者は誰でも、それがこれらの者たちが挙げ得る〔＊限りの〕業績であることを知っていた。年長の合宿参加者たちは、この事実をただ戦時状況の影響で説明し得ると信じていた＞⁽¹⁴¹⁾。

幹部であるローゼンベルクは、なるほどそのことを、＜レベル低下＞の徴候と記していたに過ぎないが、それは既に戦争前から観察されていたのであった。そのいっそう深い原因は、あの別の側面から嘆かれていたこと、＜ローゼンベルク当局＞とナチス大学教員同盟が少なからず関与していた＜学問と政治の境界の紛糾＞の中にこそあった。⁽¹⁴²⁾ナチス大学教員同盟の＜合宿活動＞は、この点では確かに全く何の救済策を講じる力も持たなかった。個々の専門合宿に関する報告は、ナチス大学教員同盟の間では反対意見を表明することが可能であったと述べられていたように、それは第三帝国における古代学の状況についての様ざまに異なる

姿をその限りで伝えている。＜ローゼンベルク当局＞のナチス大学教員同盟に対する影響力がますます強まっていく段階で、特にこうした傾向が明らかである。ヴェルツブルク、アウグスブルク、それにゼーフェルトに集まった学者たちは、徒党を組んだ古代学集団とも、或いは全く新しい目標に向かう古代学緊急特殊部隊とも見做され得ないことは、舞台裏を覗くだけで全く明らかであった。ヴェルツブルクにおいてドレクスラーとシャッヘルマイヤーによって持ち出された原理的諸問題の議論は、恐らくほとんど期待するような刺激を与えず、むしろはるかに否定的反応を起こしたのであった。また、とどのつまり、＜第三のフマニスム＞と＜人種問題＞のいずれも完全に体制に順応して克服されてしまうことは、大学教員同盟の合宿においてはなかった。ドレクスラーが、ヴェルツブルクで呼びかけた覚醒は既に始めから行き詰まっていたのである。それに相応しく、ナチス大学教員同盟の＜専門学術的＞活動の直接的な成果は、*Deutschlandes Erneuerung*と云うナチス大学教員同盟の機関誌におけるそれ程綱領宣言的ではない論稿に限られていた。フランツ・ミルトナーが『古代学のドイツ的課題』と云う自らの寄稿の中で証明しようとしていたのは、＜間接的且つ直接的に最も価値ある根拠に基いた民族的並びに人種学的立場の古代学研究は、ドイツ的世界観の貫徹をめぐる戦いの中で創造され得るのである＞と云うことであった。彼の弟子ペーター・ユリウス・ユンゲ (Peter Julius Junge) の『東部におけるドイツ古代学の課題』と云う論稿は、後で詳細に立ち返られるが、更に少数の学者たちの《精神科学の戦時動員》と云う特別形態への衝動をかなり明確に知らせている。⁽¹⁴³⁾ 幾らか他の前提条件から判断されねばならない《古代学の戦時動員》の主要形態が、以下で取り分け問題になる。⁽¹⁴⁴⁾

第3節 ＜古代学の戦時動員＞

ナチス大学教員同盟の合宿活動と＜精神科学の戦時動員＞との間の具体的な関係を、同盟の全国委員長シュルツは、ローゼンベルクに宛てた＜弁明書＞の中に既に記していた。⁽¹⁴⁵⁾ 大学教員同盟を少なくとも部分的に支配下に収めるのにローゼンベルクは成功したが、《リッターブッシュ行動 (ドイツ精神科学の戦時動員)》(Aktion Ritterbusch, Einsatz der deutschen Geisteswissenschaften im Kriege) に対して影響力を及ぼそうとする彼のあらゆる努力は成果のないまま

であった。⁽¹⁴⁶⁾ 帝国文部省と学界 (Forschungsgemeinschaft) に支持されて、リッターブッシュは、ナチス大学教員同盟の専門合宿よりも、精神科学における彼の《行動》に本質的により多くの反響を得ることに成功した。戦時動員に加わった専門分野は、それらの研究の前面に、⁽¹⁴⁷⁾ かつまるところ、この闘争において重要であるところの《ヨーロッパ新秩序の理念》⁽¹⁴⁸⁾ を押し出すべきであった。イデオロギー的美辞麗句の背後に、しかしまた別の目的が明らかになっている。直接的には戦争には役立たない精神科学は、自然科学や技術的諸専門と比べて明らかに今にも不利な状況に陥るように思われていたのであった。⁽¹⁴⁹⁾ それ故もちろん、《リッターブッシュ行動》からは物質的援護は期待されなかったであろう。⁽¹⁴⁹⁾

古代学は、はじめ、比較的遅れて戦時動員に加わった。リッターブッシュは、⁽¹⁵⁰⁾ <彼らの世界観的な態度を顧慮せずに、あらゆる政治的に濃淡のある学者たち> を一緒にしていると云う大学教員同盟委員長シュルツによって挙げられた非難は、ヘルムート・ベルフェによって召集された《古代学専門大会》 (Fachtagung der Altertumswissenschaft) に対してもまた向けられた。ベルリン大会には、ミルトナー、ドレクスラー、それにオッペルマンのような活動的なナチス大学教員同盟の会員たちだけではなく、例えば代表として、H. U. インスティンスキーも出席していた。⁽¹⁵¹⁾ そこから結論され得ることは、イデオログのローゼンベルクがそれを歓迎していたようには、古代学内部の戦線はそれ程明確に際立ってはいなかったと云うことである。他方、開戦の高揚感の下、これまで傍観していた多くの者たちもまた、ベルリン大会で計画された『大ドイツの古代学』と云う共著に協力する衝動を感じたことは否定出来ないことであった。⁽¹⁵²⁾ この大会は、一その外観が、この点を既に示唆していたが一合宿の理念をそれ自体求めておらず、昔ながらの古典古代学の<専門大会>が、むしろここでは継続されているかのような印象を与えていた。⁽¹⁵³⁾ 帝国文部大臣ルストによる大会の公式の開会は、古代学者たちのこの集会を、その他の精神科学の戦時動員の催し物から正に際立たせていた。⁽¹⁵⁴⁾ その点は、新聞報道にも明らかであったが、⁽¹⁵⁵⁾ ローゼンベルクによって編集されていた *Völkische Beobachter* は、それが特徴ではあるが、この件に無関心であった。ルストは、彼の演説で、<新しい帝国は古代学を捨て去ることは出来ないし、その意志もない。ドイツ古代学は、むしろ大いに振興されねばならない、何故なら、大ドイツ帝国はこの点に関してもヨーロッパに対し責任を負っている

のだから>と強調していた。⁽¹⁵⁶⁾この意味で、この専攻に対し、<将来のために、考えられ得る限りの精神的、並びに物質的手段が自由に用いられるべきである>。⁽¹⁵⁷⁾

専門大会でなされた8本の講演の内、考古学の発表が、新聞では特に詳しく価値あるものと評価されていた。⁽¹⁵⁸⁾ベルフェの基本的な論述は、そこに合わせて38本の寄稿論文を以ってベルリン大会の成果が発表されていた共著『新たな古代像』の序文から推論されるだけである。⁽¹⁵⁹⁾ベルフェは、権力掌握直後のナチズムに対する信奉を更に深めていた。古代とのナチズム的対決は、その間戦争経験によって新たな地平に高められた。<元々、独自の身体的、精神的存在の一片として、我われは古代から現代にまで作用を及ぼし続けている力を感じている。世界を揺り動かす政治の圧倒的経験の下で、ローマ人の政治的本能、ギリシア人の国家思想、両国民の歴史的運命が、興奮する程間近に迫っている。スポーツ、身体的修練、要するに身体的感覚がナチズムの根本思想の会得と共に経験する並外れた力が、スポーツや造形芸術に対する古代人の自然で密接な関係を生み出しただけでなく、全般的に彼らの生を担い、彼らの活動を満たしていた物質的な思考や感情に対してもそうした関係を生み出しているのである。ギリシア人において、最も堅固な現実主義と最も純粋な理想主義はいかにして出会うことが可能であったのか、今日、二つの力によって揺り動かされ、両者の関係において等しい偉大な現代に直面して、その理由を我われは予想し得るのである>。⁽¹⁶⁰⁾

人種思想に対する信奉も、少なからず明らかであった。<けれども、結局全てをこの新しい見方に換えること、つまりその地平を譲ってしまうこと、古典古代学は、今やその前に自らを晒しているのである。我が国民の目覚めたる人種本能が、古代の両国民をして夫々その流儀で我らの血縁、我らの気質と感じさせる。即ち、この本能が、両国民を本質的に親族の範囲に含めるのである>。呪文のような式文と並んで、もちろん見逃されてならないのは、<浅薄な気分とか世論に安易に迎合すること>の警告も為されていることである。<新しい古代観は、我われを今日動揺せしめている感情と願望の領域だけで戯れているのであれば、直ぐに興奮させる架空の儚い物語に過ぎぬであろう>。古代学は、戦時動員において、正に<学問的認識の厳しい諸々の要求と原則>に服さねばならなかった。⁽¹⁶¹⁾リッターブッシュやルストと同様に、ベルフェのプログラムの特別な強調点は、この企画のヨーロッパの視点を、彼が強く前面に押し出すことに努めていたことに明

らかである。ドイツ古代学の研究は、＜真のヨーロッパ的課題のために為されていると云う自覚によってこれまで常に担われて来たのであるが、ヨーロッパがその新秩序のシンボルに内部的な統一と有機的な構成を正に獲得しようとしているこの現代において、古典古代学のヨーロッパ的特質は、明らかに一段と大きな意義を獲得するのである＞。

ベルフェは詳しく述べているが、『新たな古代像』というタイトルを以って、＜この像が既に完成しているかのように主張され＞てはならず、・・・＜むしろ、全体的な目標が示されているのであって、その目標に向かって、今日古代学研究は動いているのであり、手段や方法は個々様ざま、問題提起も成果も多種多様であるだろう＞⁽¹⁶²⁾。二巻の書物の諸々の論稿の個別的分析は、ここでの問題にはなり得ない。その書物には、全体的に慎重に定義されたテーマで教育学、文献学、哲学、それに古代史の諸論稿が代表されていたのと同様に、発見や発掘の報告が為されていた。論文題『政治的体育としてのギリシアの体育教師と競技者』は、この関連では典型的なものでは全くない。そこに存する意図に合わせると云うのであれば、例えば、フリードリッヒ・ツッカー（Friedrich Zucker）の『ヘレニズム・ローマ時代におけるエジプトの人口事情』と云う論稿など、著しく軽薄に時代に媚びた装いを与えることが可能であったろう。しかしツッカーは、関連したミイラ像とか人物彫像の人類学的分析の複雑に絡み合った問題を、＜史料状況そのものが、余り満足出来るものではない＞⁽¹⁶³⁾ことを明らかにしていると述べ、打ち切ってしまった。⁽¹⁶⁴⁾

ベルフェは、彼の序文の烈しい始まりの言葉の後で、新たな＜ナチズム的＞古代史像に対する余りにも強く張りつめた期待に対し早々と冷水を浴びせていた。シャッヘルマイヤーが、月刊誌 *Rasse* の中で、＜古代史＞の専門報告を読者たちに解説していたように、＜ここに提示された古代の人種学的考察の初めての試みを保持する＞ことを望んでいた者たちは失望を感じたに違いなかった。＜付け加えれば、38人の学者たちのほとんどが素晴らしい出来栄の論稿の中で、しかし、あらゆる点で最も重要な最後のミルトナーの論稿しか、根本的な意味で人種学的な考察を行っていたことを示していない。それ以外は、むしろ民族固有の自己展開と云う基盤から考察が行われている＞⁽¹⁶⁵⁾。シャッヘルマイヤーにとって良い出来栄えと思えたのは、この意味で古代ローマ時代とアウグストゥス時代の再

生についての論稿であった。ギリシア古代とローマ帝政期の論稿は、＜遺憾ながら、何れも同じような仕上がりで調子を示していなかった。歴史や、尚古趣味、考古学、それに文学史等々の各論稿が並べられているが、適切に共鳴し合うには全く至っていない。もしも、編纂者が、この全体の考察の最後に人種思想を取り上げていたならば、それらの論稿は、恐らくそれらに欠けている共通の意味（と分母）を認識し得たであろうに＞⁽¹⁶⁶⁾。

全く似たような意味で、共著の一員に入っていたハンス・オッペルマンも述べていた。彼の印象によれば、多くの場合、＜内的に必要な不可欠な問題提起ではなく、学術的用語を使って示されるにしろ、または何か別のもので示されるにせよ、旧来の学問的姿勢が時代に合わせてもっともらしく色付けされていた＞のであった。反対に、彼らの研究の中で、人種が重要な位置を占めていたアルトハイム、ミルトナー、シャッヘルマイヤー、それにヴェーバーのような研究者たちの方が、どちらかと言えば遥かに＜古代学の実際の姿＞に相応しかったのである。⁽¹⁶⁷⁾ 1944年のヴェーバーの評価によれば、『新たな古代像』は、古代史の領域では何も変わっていないなかったことの＜最も明白な証拠＞⁽¹⁶⁸⁾であった。

明確に、公然とナチズムの肩を持った古代史家たちの仲間では、ベルフェは、最も穏健な方に分類されるであろう。シャッヘルマイヤーとヴェーバーによって代表された位置と比べれば、確かに極めて穏健である。言うまでもなく、この評価は、編纂者として共同責任のある彼による『新たな古代像』には、ベルフェの＜激しい綱領的な要請にもかかわらず＞⁽¹⁶⁹⁾、ナチス・イデオログたちの要求に適っていたであろう人種思想は、結果として中心に置かれていないと云う無視し得ない論評に依拠している。⁽¹⁷⁰⁾ エルクスレーベンは、ヴェーバーを見習って、ベルフェの輩どもが＜帝国文部省の学術政策に対し決定的な影響力を維持している＞と苦情を言っているが、彼は古代学の戦時動員の監督と共にベルフェが割り当てられていた指導者の役割をもまた明らかにしていた。⁽¹⁷¹⁾ 帝国文部省との結び付きは、その当時、全く初めは結ばれていなかった彼のライプツヒヒ大学長時代に固められたのであった。カール・ラインハルトの証言によれば、ベルフェが、＜激しく異議を唱えた神学部教授団と法学部教授団＞を学長として擁護したことに、ナチス大学政策の過激な代表的人物には、彼は入れられないと云う事由が示唆されていた。⁽¹⁷²⁾ しかし、こうした確認の一方で、戦時期の最後に至るまでの、スパルタの

範例を呼び出すだけではなかったナチズム的な古代論争への非常に決定的なベルフェの関与は、決して否定されないであろう。⁽¹⁷³⁾

＜古代学の戦時動員＞の公的支援は、専門大会への〔*帝国文部大臣〕ルストの参加とか財政的援助に限られなかった。ベルリン大会終了後数週間も経ずして、宣伝省によって編集された *Zeitschriften-Dienst* には、『ドイツ精神の偉大な事績—ドイツ古代学の任務』と云うテーマが論じられていた。⁽¹⁷⁴⁾ そこでは、考古学調査に特別配慮した古代学の戦時動員の全般的な目標設定を、宣伝的に最も効果のある支援と認めていた。＜報道指針＞は、その意図を、以下のように「何故、重要か」と云う表題で略述していた。＜ドイツの文化活動を中断せず継続することが、ナチスの戦争指導の原則である。取り分けまた、確かに、その大部分の発掘作業を中止しなければならなかったドイツ古代学の仕事もそこに含まれているのであり、そのためには、ドイツ古代学は理論的諸研究を強化し、発表を継続するのである＞。特に、「目標」と云う節に定義された指針に示された古代研究に関する報告は、古典古代学のその立場を正に強化するのに相応しかった。＜古代学は、最早、従来のように実際の生活に結びつかない精神科学と見做されてはならない。—ここでは、基礎的研究の傍らに、様ざまの実用的な利用可能性が存在していることが指摘されねばならない—。ドイツ国民にとって、古代学の意義は、ドイツの先史時代とか初期歴史だけに限られないのであり、古典考古学や、またゲルマン人の民族移動期の特に重要な研究の他に、正に最近年では小アジア及び西南アジアの諸文化の研究が、人種研究や人間の系統発生史にとって重要になっていることが指摘されねばならない。—戦争後、決定的な世界的地位を占めるであろう偉大なるドイツにとって、その目標において広く興味をそそられる古代学は、更には文化的な責任が重大なのである＞。⁽¹⁷⁵⁾

広範な基盤の上に組織された＜古代学の戦時動員＞は、1943年まで追求されている。ベルフェは、ベルリン大会の閉幕の挨拶で、ベルリン大会でなされた諸発表は間もなく公刊されることだけではなく、別に＜大きな、新たな政治的な解説を意図して叙述された作品『ローマとカルタゴ』が準備されている＞⁽¹⁷⁶⁾ことを早々と予告していた。その案はヨーゼフ・フォークトにより提案され、この＜共著＞⁽¹⁷⁷⁾の個々の論稿は、＜数日間の討議作業＞によって議論されたものであった。＜政治的解釈の意図＞が、極めて明白にその作品を特徴づけていた。そのテーマの時

局性は、全く疑いがなかった。更に、〈ローマとカルタゴ〉と云う歴史的表象は、〈底知れない民族憎悪と民族絶滅戦争のスローガン〉としてのみならず、ヒトラーを歴史的に比較構成するのに不可欠の要素でもあった。⁽¹⁷⁸⁾〈古代学の戦時動員〉のこうした局面に対しても又、文化宣伝広報の側面が、もちろん別の動機から都合良く準備されていた。1943年7月23日付き秘密報道指令では、〈所与の理由から、・・・《現代にとっての古代の意義》と云うテーマは、どんな議論も否定的傾向を伴い適切ではない〉と強調されていた。その根拠は、恐らく〈ヨーロッパの文化的記念物〉が脅威に晒されていることが今やはっきりと示されたローマの爆撃が与えたのであった。こうした理由から、〈このテーマを取り扱う場合、・・・《ローマの問題》(römische Frage)に関する特定の宗派傾向と議論は相応しくない〉ように見えたのであった。⁽¹⁷⁹⁾つまりローゼンベルクの支持者たちによる文化宣伝広報の妨害を阻むことが問題であって、そのことは、古代学には好都合であり得たのであった。『ローマとカルタゴ』と云う共著は、一ここでは、自覚していたのか、どうかは決められないにせよ、目下の戦争の宣伝、ないし文化広報宣伝に優れて順応していたのである。⁽¹⁸¹⁾

古代学の戦時動員のこの二番目の共著には、シャッヘルマイヤー、オッペルマン、それにヴェーパー等の書評者が『新たな古代像』には欠けていると気づいていた問題が、全く意識的に取り上げられていた。その問題を、ヨーゼフ・フォークトは次のように簡単に述べていた。〈この〔*ポエニ戦争と云う〕世界史的ドラマにとって従来ほとんど注目されて来なかった問題提起が、現代の学問研究に対して前面に出て来た。即ちこの容易ならぬ紛争は、民族の血の相続者たちによって起こったのであろうか、つまり、本質的に北欧的な特質を持っているローマに対し、その他者性がポエニ民族の人種構造から結果として生じたカルタゴの世界が対峙していると云う事実によって起こったのであろうか？そして、この人種的対立と云う要素は、国家建設において、経済において、それに、外交と戦争指導において、宗教、芸術、歴史意識において、如何なる結果を齎したのであろうか？〉。⁽¹⁸²⁾フォークトの認めるところでは、最も重要なことは、〈古代は、現代の人種概念を知らなかった〉と云う点にあった。それ故に、テーマに着手するには、〈大胆さと、同時に慎重さ〉を必要としていたのであった。⁽¹⁸³⁾

執筆者たちは、この二つの行動様式を全く、まちまちに実行していた。既にタ

イトルからして人種思想との対決を示唆していた論稿には、その問題提起はそれ自体重要であった。取り分けシャッヘルマイヤーは、『人種史的考察におけるカルタゴ』と云う緒論的論稿で、その機会を利用して、個々の〈人種の構成要素〉を非常に厳密に分析していた。ローマが、〈その力を、明確に形成された人種的な主要構成要素の存在〉に（負っていた）一方で、カルタゴは〈砂漠地帯系人種とアルメニア系人種〉の間を、〈人種と世界の間を取り替え子(Wechselbalg)〉のようにふらついているように見えた。フリッツ・テューガーが、『西部地中海における民族闘争と人種闘争—シチリアにおけるギリシア人とカルタゴ人』と云うテーマを考察し、〈混血〉(Blutmischung)、〈血液混入〉(Bluteinschläge)等の言葉を取り上げた際、にもかかわらず人種理論のカテゴリーは、シャッヘルマイヤーのその説明と同じように、彼の説明には結果的に何ら影響を与えていなかった。⁽¹⁸⁵⁾ マティアス・ゲルツァーは、論稿『ローマ—カルタゴ戦争の勃発の際の歴史的要因としての人種対立』と云うタイトルに込められている中心的問題に関して、注目に値する結果に至った。即ち、〈対立する両者の人種は、そこでは全く僅かな役割さえ果たしていなかった〉のである。ポエニ戦争が経過する中で、〈長引けば長引くほど、ますます人種の相違が、世界史的に意味を持ったこの対決の経過に大きく影響を与える〉ことが、確かに現われたのであった。⁽¹⁸⁶⁾

共著『ローマとカルタゴ』は人種思想に基づいていたと云うクラウス・フォン・ゼー (Klaus von See) の確認は、確かにフォークトによって素描された問題提起に関してのみ同意し得る。⁽¹⁸⁷⁾ 論稿全体の評価は、しかし、シャッヘルマイヤーの詳論だけを根拠にしてはならないであろう。ゲルツァーの異なった考察方法や、〈凡そ論稿の半分は、あらゆるナチスの月並みな公式 (NS-Schablonen) に拘束されていなかった〉と云う事実も、もちろんまた含められねばならない。⁽¹⁸⁸⁾ ナチズム的歴史観の要求を、古代学のそれ〈自体の言行〉もまた、厳密な意味では十分には満足させ得なかったのである。共著の〈カルタゴ人の本性をローマ人の本性への相互作用から推論し、人種対立の意味をカルタゴとローマの権力闘争の中に探る〉と云う目標設定に比べれば、*Völkische Beobachter* の評者にとっては、その結果は、〈心もとない、奇妙な、取るに足らぬもの〉に留まっていた。⁽¹⁸⁹⁾

ここで要約的に特色が素描された両共著は、戦時期の古代学自体の言行の重要な証拠資料としての価値を有しているであろう。専門分野におけるその成果とそ

の反響から、＜古代学の戦時動員＞は、言うまでもなくその範囲内で個々の専門家たちの＜知的《自己責任》の自覚＞が強められたが故に、ナチス大学教員同盟の合宿活動よりもはるかに成果が豊かであった。⁽¹⁹⁰⁾この動員形式では、ナチズム的歴史観の公式路線に表面上順応している徴候が、全体から見れば優勢であった。戦争に制約された組織体の内と外の先導的な古代史家たちもまた示しているように、この点は、個々のケースにおけるいっそう強い協力の用意を排除するものではなかった。

註

第3章 古代学自体の言行

- (1) Irmscher, Unterricht (第1部第2章、註19)、238f.による。*Altphilologenschaft bewegenden Fragen. *Gegenwartsbedeutung des deutschen Gymnasiums.
- (2) *Die Erziehung des politischen Menschen und die Antike. *Volk im Werden* 1, 1933, 3, 43-49.
- (3) E. Kriek, Unser Verhältnis zu Griechen und Römern, *Volk im Werden* 1, 1933, 5, 77f. 及びIrmscher, 同書、239ff.を参照。
- (4) Heiber, 前掲書(第1部第2章、註1) から引用、170。

第1節 戦争開始までの動向

- (5) *Gnomon* 11, 1935, 286, 511f. 576を参照。
- (6) Heiber, 同書、709を参照。
- (7) この点について詳しくは、Heiber, 同書、273ff。
- (8) 同書、260。
- (9) このことについては、Karl Ferdinand Werner, *NS-Geschichtsbild und die deutsche Geschichtswissenschaft*, Stuttgart 1967, 61f。
- (10) Carl Weikert, *Das deutsche archäologische Institut*, 第2版、Berlin 1950 (拙訳、カール・ヴァイケルト著、ドイツ考古学研究所—その歴史、組織、課題—〔第2版〕、四国学院『論集』、第125号〔2008/3〕、65—88頁)を参照。
- (11) Heiber, 前掲書、605。— H. Bogner (1885. 11. 8-1948. 12. 28)、1933ミュンヘン大学私

- 講師、1937年フライブルク大学員外教授、1941年シュトラスブルク大学正教授。H. Hommel, *Gymnasium* 56, 1949, 77-79, 更に取り分け、Heiber, 同書、553ff.を参照。
- (12) W. Frank, *Die Lehren der Antike*, 1935年9月27日のVB (南ドイツ版)。(《 》の強調は原文による)。
- (13) **Verwirklichte Demokratie. Die Lehren der Antike*. Hamburg 1930. Christ, Entwicklung (第1部第1章、註7)、583を参照。
- (14) W. Frank, 同論稿。
- (15) H. Bogner, *Die Judenfrage in der griechisch-römischen Welt, Forschungen zur Judenfrage*, Bd. 1, Hamburg 1937, 81-91 更に、同、Philon von Alexandrien als Historiker, 同、Bd.2, 1937, 63-74を参照。
- (16) Heiber, 前掲書、605。
- (17) 同書、609。
- (18) 同書、256, 566を参照。
- (19) 同書、708ff. とPeter Schumann, *Die deutschen Historikertage von 1893-1937. Die Geschichte einer fachhistorischen Institution im Spiegel der Presse*, マールブルク大学博士 (哲学) 論文 1974、406ff. を参照。
- (20) P. Schumann, 同書、430。
- (21) **Thukydides und das Wesen der altgriechischen Geschichtsschreibung*, Hamburg 1937 (Schriften des Reichsinstituts für Geschichte des neuen Deutschlands 10). P. Schumann, 同書、419を参照。
- (22) それについて何も論評していない。E. Botzenhardt, *Der 19. Deutsche Historikertag in Erfurt 5.-7. Juli 1937*, *HZ* 156, 1937, 663 (659-667) を参照。
- (23) *Theoderich der Große und seine römische Sendung. Heiber, 前掲書、710f. を参照。最初に印刷されたのは、R. Herbig編、*Würzburger Festgabe*, Heinrich Bulle 70歳献呈論文集、1937年12月11日、Stuttgart 1938、111-129であった。更に、Günter Katsch, *Alexander Graf Schenk von Stauffenberg*, ライプツヒ大学博士 (哲学) 論文、1968 (原稿)、IV, 4を参照。シュタウフェンベルクの詳しいテオドリック像は同、III, 78ff.。
- (24) Heiber, 同書、713。
- (25) Moritz Edelmanによる。Der 19. Historikertag in Erfurt vom Geschichtserzieher gesehen, *Vergangenheit und Gegenwart* 27, 1937, 476。

- (26) P. Schuman, 前掲書、420f. を参照。
- (27) Heiber, 同書、722f. は、1937年8月11日付きトリノの新聞〈Stampa〉からG. Piazzaによるコメントを引用している。
- (28) Heiber, 同書、727を参照。
- (29) *Romanitas und Germanitas, ihre Auseinandersetzung im süddeutschen Raume. Heiber, 同書、733を参照。ヴェーバーのテーマについては、*VIII. Congrès international des sciences historiques Zürich 1938, Actes du congrès*, Paris 発行年無、299を参照。他の公式に申請され、受理されたが、後になされなかった諸論稿とは異なって、ヴェーバーの場合、大会記録に要約が全く呈示されていない。
- (30) **Kaiser Julian und das Judentum*. Heiber, 同書、738を参照。フォークトの論稿は、〈後期古代の世界観闘争の諸考察〉 (*Studien zum Weltanschauungskampf der Spätantike*) と云う副題を伴って、Leipzig 1939 (=Morgenland H. 30) に公刊された。〈ユダヤ人問題研究部〉 (Forschungsabteilung Judenfrage) からフランクとは関係ない〈ユダヤ人問題調査研究所〉 (Institut zur Erforschung der Judenfrage) が生まれると、ヨーゼフ・フォークトは、その通信会員に指名された (*Gnomon* 18, 1942, 192に依る)。この新しい研究所については、Heiber, 同書、1070ff. を参照。
- (31) K. Christ, Joseph Vogt und die Geschichte des Altertums. Eine Würdigung, *Saeculum* 21, 1970, 123.を参照。
- (32) Heiber, 同書、738を参照。
- (33) 同書、733、554を参照。ボグナーは、ポーランド人同僚の報告「専制君主制の政治的基本理念」 (*Die politische Grundidee des Imperatorats*) にかつて賛意を表していた。*Actes du congrès*, 299f. を参照。
- (34) *Actes du congrès*, 300f. を参照。シュタインアッカーについては、Heiber, 同書、400を参照。
- *Les causes profondes de la ruine du monde antique.
- (35) *Actes du congrès*, 307. *Aristophanes und die Probleme der Sozial- und Wirtschaftsgeschichte.
- (36) こうした方向で、最も先に進んだのは、恐らくHans Oppermannであった。同、*Der Jude im griechisch-römischen Altertum*, München 1943 (Schriftenreihe zur weltanschaulichen Schulungsarbeit der NSDAP, H. 22)。ローゼンベルク事務局の〈党公式教材課〉 (Amt

- Parteiamtliche Lehrmittel) が発行者であった。そのパンフレットには、〈公務専用!〉と書き留められていた (IfZ: Db 04. 16)。Hans Oppermann (1895年10月13日)、1926年グライフスヴァルト大学私講師、1928年ハイデルベルク大学、1931年員外教授、1935年フライブルク大学教授、1941年シュトラスブルク大学、1954年—61年ヨハンネス・ギムナジウム校長 (Leiter d. Gelehrtenschule des Johanneums)、1959年定年。
- (37) *Berichte über den VI. Internationalen Kongreß für Archäologie Berlin 21-26. August 1939*, Berlin 1940を参照。
- (38) 〈考古学者、ベルリンに集う—第6回国際考古学会議 (8月21日—26日) について〉、1939年7月21日付き *Deutsche Allgemeine Zeitung* を参照。VB は、特徴的であるが、記者会見について全く載せていない。
- (39) 1939年8月25日—28日のインスブルックでの帝国先史連盟の第2回年次南ドイツ研究大会 (1939年8月22日付き VB [南ドイツ版] の *Die Alpen und der germanische Lebensraum* を参照)、とオルデンブルクでの帝国先史連盟の研究大会 (1939年8月31日付き VB [ベルリン版] の J. Benecke, *Die Forschung und das Altertum* を参照) が問題であった。
- (40) 1939/40会計年度ドイツ考古学研究所年次報告、*Archäologischer Anzeiger* 1940, X. を参照。フックスについては、136f. (第2部第1章第3節、未訳) を参照。
- (41) *Berichte*. (註37)、21を参照。
- (42) 同報告、14。ヴァカノについては、157f. (第2部第2章第3節、未訳) を参照。
- (43) 同報告、76 (74—78)。
- (44) 同報告、76。
- (45) 同報告、78。
- (46) F. Altheim, *Die Felsbilder der Val Camonica und die altitalische Kultur*, 同報告、442f. を参照。更に、本書125f. (第Ⅱ部第1章第2節、未訳) を参照。H. Berve, *Das Athen des Peisistratos*, 同報告、431—433。E. Kornemann, *Das Mausoleum des Augustus*, 同報告、471、それに H. E. Stier, *Hellas und Ägypten*, 同報告、282-291 (更に、以下) を参照。
- (47) かつての帝国現代ドイツ史研究所の新聞切り抜き資料庫 (今日では、IfZ. München) を、著者は VB の〈ベルリン版〉のために利用することが出来なかった。(Heiber, 同書、321を参照)。
- (48) *Altertum und Gegenwart*. 開会式に関する報告、1939年8月22日付き VB (南ドイツ版) を参照。

(49) J. Benecke, Unerschöpfliches Ägypten!, 1939年8月24日付き VB (ベルリン版)。

*Von umwälzender Bedeutung für die arische Frühgeschichte des Mittelmeeres.

(50) R. Herbig, Philister und Dorier, *Berichte VI. Archäologen-Kongreß Berlin*, 308 (305-308).

(51) J. Benecke, 同上 (註49) 記事。

(52) 同記事。

(53) H. E. Stier, Hellas und Ägypten, 289. シュティアは、この代りに、Ed. Meyer, *Geschichte des Altertums*, 3版、Bd.1. 2, 449, 2版、Bd.2. 1, 321 (の註3) を引用している。シュティアは、そっけなく先例と関連させていた。同、*Zum römischen Philhellenismus der Flaminiuszeit, Gedenkschrift zur 150. Wiederkehr des Gründungsjahres der Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin*, hg. H. Leussink 他、Bd. 2, Berlin 1960, 614-624に所収も参照。

(54) この問題は、H. Berve, Zur Kulturgeschichte des Alten Orients, *Archiv für Kulturgeschichte* 25, 1935, 216-230とW. Otto, Forschungsberichte zum Problem der Universalgeschichte *DLZ* 58, 1937, Sp. 1119-1133, Sp. 1161-1175との間の論争を参照。

(55) J. Benecke, Unerschöpfliches Ägypten! (註49)。

(56) Bollmus, Amt. (第1部第2章、註 [20]) 191 (ベネッケについて)、及び210を参照。更に、本書、55 (第1部第2章第2節、本拙訳 [その2]、187頁) を参照。

(57) 5, 1939, 438-445. この雑誌をめぐる議論は、簡単には、Stier, *Philhellenismus* (註53)、614。

(58) E. Kirsten, Der international Archäologenkongreß in Berlin 1939, *Neue Jahrbücher für Antike und deutsche Bildung* 3, 1940, 158 (156-160).

(59) 著者の記載もなく、Ausgrabungsergebnisse am Nilと云うタイトルで、同じ日に一文が著されたが、シュティアに関する部分是要約されていた。1939年8月24日付き VB (南ドイツ版) 参照。一付け加えれば、VBには会議に並行して催された展覧会も、また詳しく報告されていた。W. Hartmann, Die Kunst der Spätantike im Mittelmeerraum, 1939年8月24日付き VB (南ドイツ版) を参照。更に、1939年8月24日付きの VB (ベルリン版) の W. Wien, Lebenskraft der Antike-Eine Ausstellung zum 6. Internationalen Archäologenkongreß を参照。

(60) この点については、本章、註39に挙げられた記事、並びに1939年8月28日付き VB (南ドイ

ツ版)の記事、Vorgeschichte in Alpenländernを参照。

(61) 1939年8月31日付きVB(ベルリン版)。**Die Forschung und das Altertum—Deutschlands Anteil an der Erforschung Alteuropas.*

(62) 同記事。

(63) 本書、43 (第1部第1章第2節、本拙訳〔その1〕、210頁)、及びH. Möbius, *Gnomon* 29, 1957, 637f. を参照。

(64) J. Benecke、前掲記事(註39)。

(65) 前掲記事(註38)を参照。

(66) E. Kirsten、同論文(註58)、156を参照。

第2節 ナチス大学教員同盟の〈合宿活動〉

(67) Hans Drexler, Schlußwort, 1941年1月8日—12日のDas Lager des Fachkreises Altertums-wissenschaft in Würzburgの記録文書(以下、Lager Würzburgと引用)、52。

この記録文書は、合宿参加者に公に送付された。

(68) 例えば、K. D. Bracher他、Machtergreifung, (第1部第2章、註29)、322を参照。

(69) Joachim Werner, 前掲書(第1部第2章、註15)、76f. を参照。

(70) E. Nolte, Typologie (第1部第1章、註131)、9。

(71) 同書、8。A. Baeumler, *Männerbund und Wissenschaft*, Berlin 1934を参照。

(72) H. Oppermann, Wissenschaftliche Gemeinschaftarbeit, *Deutschlands Erneuerung* 25, 1941, 344 (337-345)。オッペルマンについては、註36を参照。

(73) Oppermann, 同論文、345。

(74) H. Drexler, Lager Würzburg, 3. 他に、R. v. Kienlerの簡単な報告、Die politische Aufgabe der deutschen Altertumswissenschaftler. Arbeitslager des NSD-Dozentenbundes in Würzburg, *Mitteilungen des NSD-Dozentenbundes*, Folge 2 Jahrg. 4 (Februar 1941), 2. (IfZ: Db 28.01)、及び*Deutschlands Erneuerung* 25, 1941, 103の短信を参照。

(75) H. Drexler (1895.3.11)、1925年ブレスラウ大学私講師、1932年員外教授、1935年教授、1940年ゲティンゲン大学、1945年定年。

(76) 1941年1月18日付きシュルツのローゼンベルク宛書簡による(NS 8/199 fol. 34)。

(77) 同書簡。

(78) 本書、57 (第1部第2章第2節、本拙訳〔その2〕、190頁)を参照。

- (79) 本書、105（本拙訳、107、108頁）を参照。
- (80) Lager Würzburg, 2（参加者名簿）。
- (81) Drexler, Lager Würzburg, 53. **Niederschrift*.
- (82) 同書、3。教員合宿に参加が許されるためには、主義主張の立派さだけでは十分ではなかった。ドレクスラーは、古典文献学者Wolfgang Aly (1881. 12. 8-1962. 9. 3、1908年フライブルク大学私講師、1914年非常勤教授 [n. planmäß. a. o. Prof.]、1928年実習講師 [Lektor]) を、＜学問的業績の満更でもないもの＞と見做していたが、彼を専門合宿に招くことを拒絶した。その訳は、その古参党员は、＜必要なる知性的な明晰さと紀律＞を欠いていたからであった。ドレクスラーの1943年6月30日付きエルクスレーベン宛書簡 (MA 116/1-Aly) を参照。Aly は、1931 年に入党していた。Personalbogen Aly (R 21/376)、及びIrmscher, Altsprachlicher Unterricht. (第1部第2章、註19)、248を参照。
- (83) H. Bogner, A. v. Blumenthal, E. Burck, H. Drexler, W. Eberhardt, H. Gundert, R. Harder, H. Herter, H. Hommel, U. Knoche, A. Lesky, W. Nestle, H. Oppermann, W. Schadewardt, O. Seel, R. Till.
- (84) F. Miltner, H. Rudolph, F. Schachermeyr, F. Taeger, L. Wickert.
- (85) W. Hahland, A. Schober, W. Zschiezschmann.
- (86) O. Höfler, F. Neumann.
- (87) R. v. Kienle, H. Heyse.
- (88) A. v. Blumenthal, R. Harder, H. Heyse, W. Nestle, F. Schachermeyr, W. Schadewardt, F. Taeger.
- (89) H. Gundert.
- (90) R. v. Kienle, *Die politische Aufgabe der deutschen Altertumswissenschaftler*, 2.
- (91) H. Drexler, *Der Dritte Humanismus. Ein kritischer Epilog*, Frankfurt 1942 (=Auf dem Weg zum nationalpolitischen Gymnasium H. 10) を参照。本書、43（第1部第1章第2節、本拙訳〔その1〕、210頁）を参照。*Der sogenannte Dritte Humanismus.
- (92) Lager Würzburg, 7f. W. Schadewardt (1900. 3. 15-1974. 11. 10)、1927年ベルリン大学私講師、1928年ケーニヒスベルク大学教授、1929年フライブルク大学、1934年ライプツヒヒ大学、1941年ベルリン大学、1950年テュービンゲン大学)。H. Flashar, *Gnomon* 47, 1975, 731-736を参照。
- (93) Lager Würzburg, 10。イエーガーの最も古い弟子と見做されているハルダーは、イエーガー

- に明確に反対していると云う言質をとられなかった。本書、143（第2部第2章第2節、未訳）を参照。
- (94) 本書、86（本拙訳、86頁）、及びシャッヘルマイヤー、ベルフェ、それにエーベルハルトの綱領的文書における議論の結果については、本書、46以下（第1部第2章、本拙訳〔その2〕、178-180頁）を参照。
- (95) H. Bognerの報告、*Grundsätzliche Gegenwartsaufgaben der griechischen Philologie, Lager Würzburg, 11-18.
- (96) H. Heyseの報告、*Theoretische Auffassung und existenzielle Erfahrung des Griechentums. 同書、18-25.
- (97) Lager Würzburg, 26f. (23-31). *Roms Schicksal und die augusterische Zeit.
- (98) 同書、29.
- (99) 同書、31を参照。この問題に関しては、Karl Christ, Zur Beurteilung der Politik des Augustus, *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht* 19, 1968, 336f. (329-343)を参照。
- (100) Lager Würzburg, 32-41. *Rassenkunde und Altertumsforschung.
- (101) 同書、32f. (強調は原文)。
- (102) 同書、33f. F. Schachermeyr, *Lebensgesetzlichkeit in der Geschichte. Versuch einer Einfühlung in das geschichtsbiologische Denken*, Frankfurt/Main 1940. を参照。
- (103) Lager Würzburg, 34.
- (104) 本書、24（序論、未訳）を参照。
- (105) Lager Würzburg, 34f.
- (106) 同書、35.
- (107) 同書、36.
- (108) 同書、38f.
- (109) 同書、40.
- (110) 同書、38.
- (111) 同書、41-46. *Fragen der rassenkundlichen Auswertbarkeit des archäologischen Materials.
- (112) 同書、43.
- (113) 同書、43。本書、132ff.（第2部第1章第3節、未訳）参照。
- (114) Lager Würzburg, 47-50. *Blickfeld und Einheit bei den Germanen.

- (115) 同書、52f。
- (116) 同書、54。
- (117) 1942年4月9日付きボルガーのヘルトゥレ宛書簡参照 (T 81-R. 84, fol. 95644)、1942年4月25日付きエルクスレーベンのドレクスラー宛書簡 (同、fol. 95651)、それと1942年4月27日付きヘルトゥレのボルガー宛書簡 (同、fol. 95652) を参照。
- (118) 5月24日から27日、レーゲンスブルクでの公算の大きい古代学教員合宿の参加者名簿を参照 (同、fol. 95646-48)。
- (119) 新しく加わった者たちで、古代史家のみを挙げるならば、F. Altheim, H. Bengtson, F. Hampl, A. Heuß, W. Hüttl, E. Kirsten, H. Schaefer, W. Peek, A. Schenk v. Stauffenberg, F. Vittinghoffであった (同、fol. 95646-48を参照)。本章、註84も見よ。
- (120) ここで、古代史家だけを再度挙げる。H. Berve, W. Enßlin, M. Gelzer, E. Hohl, H. U. Instinsky, U. Kahrstedt, J. Keil, H. Nesselhauf, F. Oertel, K. Stade, H. E. Stier, J. Straub, J. Vogt, H. Volkmann, それにW. Weber。
- (121) 1942年4月30日付きハルダーの学術本局宛書簡 (MA 141/5 fol. 346266-67)。
- (122) 1942年4月27日付きヘルトゥレのボルガー宛書簡 (T 81-R. 84, fol. 95652-53)。
- (123) 同、fol. 95636を参照。註119に挙げられた古代史家たちの内、F. Altheim, H. Bengtson, それにH. Schaeferが姿を現した。ヴュルツブルクの参加者名簿からは、F. Miltner, H. Rudolph, それにF. Taegerが欠けていた (本章、註84を参照)。
- (124) 1942年5月26日付きドレクスラーのヘルトゥレ宛書簡 (MA 141/3 fol. 344525-26)。
- (125) 1942年6月2日－5日、アウグスブルク、ナチス大学教員同盟古代学専門グループ集会に関する報告書 (*Bericht über Tagung des NSD-Dozentenbundes, Fachgruppe Altertumswissenschaft in Augsburg [2.-5. Juni 1942]*) (NS 21/36)。(以下、〈Ahnenerbe〉Bericht Lager Augsburgと引用)。エルクスレーベンによる議論の断片的な(手書きの)筆記からは、詳細は以下に述べられる大きな困難を伴っていたことが、読み取れるに過ぎない (T 81-R.84 fol. 95637-642を参照)。*Kultur und Politik in der griechischen Literatur。
- (126) Zum Thema des Lagers (著者不明)、(T 81-R. 84. fol. 95645) を参照。
- (127) 〈Ahnenerbe〉Bericht Lager Augsburg, 1. *Staatslenker und Kulturschöpfer.
*Mündlichkeit und Schriftlichkeit in der griechischen Überlieferung. *Die griechische staatsrechtliche Literatur und die staatspraxis des römischen Prinzipates. *Antike

- Siegesdenkmäler. *Skythen und Goten in Südrubland.
- (128) 同書、1f。
- (129) 同書、2。この報告は、事実に即していた。W. Erxleben, H. GrünwaldとA. Klemmtが関係している。その点については以下参照。
- (130) 同書、2。
- (131) 1942年8月1日付きドレクスラーのヘルトゥレ宛書簡 (NS 8/241 fol. 34)。
- (132) 1942年8月27日付きヘルトゥレのローゼンベルク宛書簡 (NS 8/241 fol. 33)。Dr. Alfred Klemmt (1895. 3. 10生) は、1930年から1940年までベルリン・ドイツ政治大学国家哲学並びに文化哲学科 (die Abteilung Staats-und Kulturphilosophie der Deutschen Hochschule für Politik in Berlin) の最初は講師として、後には科長 (Leiter) として活躍していた。A. Klemmt, *Wissenschaft und Philosophie im Dritten Reich*, Berlin 1938を参照。
- (133) 1942年8月1日付きドレクスラーのヘルトゥレ宛書簡 (同、fol. 36)。
- (134) 例えば、1942年10月18日付きグリューネヴァルトのエルクスレーベン宛書簡 (MA 141/5 fol. 346176) を参照。
- (135) この教員合宿は、1942年10月13日から16日の期間開催された。1942年10月18日付き報告書 (MA 205) は、以下で、Nachwuchslager Seefeldと引用される。
- (136) Nachwuchslager Seefeld, 2. ミュラーについては、本書 (第1部第2章第3節、本拙訳 [その2]) 註160を参照。
- (137) 同書、3f。ミュラーは、＜彼は、我々の今日の問題提起を幅広く解明している＞とナチス大学教員同盟によって2月にも文書で証明されていた。1942年2月28日付きナチス大学教員同盟の＜学問的－人物的、政治評価 [Wissenschaftl.-charakterliche politische Beurteilung]＞ (MA 116/10) を参照。ゼーフェルトでの出来事は、どんなにか慎重に、しかるべき諸報告は判断されねばならないかと云うことを示している。本書、77f. (第1部第2章第4節、本拙訳 [その2] 210頁以下) を参照。
- (138) 1942年9月4日付きボイムラーのグリューネヴァルト宛書簡 (MA 141/5 fol. 348178-80)。Dr. Hans Grünwald (1902. 1. 29生) は、マインツでカトリック神学と哲学を研究した後、ボイロンとマリア・ラーハのベネディクト会修道院で1935年古典文献学を習得し、最後にボイムラーの下で『ベネディクトス会則の教育的諸原理』 (*Die pädagogischen Grundsätze der Benediktinerregel*) で学位を得た (1939)。Lebenslauf Grünwald (MA 141/5 fol. 346203) を参照。ローゼンベルク事務局では、彼は、＜信仰的反動勢力・本局＞ (Hauptamt

- Konfessionelle Gegenkräfte)を担当していた(1944年11月22日付きグリューネヴァルト宛エルクスレーベンの書簡、MA 116/1 -Alyを参照)。
- (139) Nachwuchslager Seefeld, 1. ゼーフェルト合宿の参加者たちの正確な報告はない。
- (140) 同書、3。
- (141) 同書、1。
- (142) Hellmut Seierからの引用。同、Niveauekritik und partielle Opposition. Zur Lage an den deutschen Hochschulen 1939/40, *Festschrift Kluge*. Paul Kluge zum 60. Geburtstage dargebracht von Frankfurter Schülern und Mitarbeitern, Frankfurt/Main 1968 (原稿)に所収(167-189)、181。引用されたものは、その中でドイツの大学におけるレベルの低下が嘆かれていたドレスデン大学教授ヴィリアム・グエルター(William Guerter)の1940年3月21日付きのヒトラー宛書簡に対するニーダーマイヤー所見(Niedermayer-Gutachten)に由来していた。
- (143) *Deutschlands Erneuerung*, 25, 1941, 8 (2-11). *Die deutsche Aufgabe der Altertumswissenschaft.
- (144) *Deutschlands Erneuerung*, 26, 1942, 579-583を参照。ユンゲについては、Gerhard Oberkofler, *Die geschichtlichen Fächer an der Universität Innsbruck 1850 - 1945*, Innsbruck 1969, 170を参照。*Die Aufgabe der deutschen Altertumswissenschaften im Osten.

第3節 <古代学の戦時動員>

- (145) 本書、96(本拙訳、96、97頁)を参照。
- (146) 1941年11月21日付きローゼンバルクのボルマン宛テレックス(NS 8/186 fol. 43)。キール大学長にして帝国文部省臨時担当官、国法学者パウル・リッターブッシュは、<帝国文部省精神科学戦時動員全権委員>(der Beauftragter des Reichserziehungsministeriums für den Kriegseinsatz der Geisteswissenschaften)に指名された。H. H. Dietze, Bericht über die Arbeitstagung zum Kriegseinsatz der deutschen Geisteswissenschaften am 27. und 28. 4. 1940 in Kiel, *Kieler Blätter* 1940, 397 (397f.)を参照。Kater, Ahnenerbe (本拙訳[その2]、註46)、193f.も参照。
- (147) Dietz, 同上記事、397。
- (148) この点については、Seier, 前掲書(註142)、178に引き記されている精神科学教員合宿に

対するニーダーマイヤー所見の確認を参照。

(149) こうした背景についても、Kater, 前掲書、193f. が示唆している。

(150) 1940年4月27日－28日のキール研究大会では、古代学は明らかに代表が出席していなかった。Dietz, 前掲記事、398を参照。戦時動員と云う枠での最初の会合には、「ベルリン・全ドイツロマニスト大会（1940. 5. 17-18）」、「英国文学研究者会議（ヴァイマル、1940. 6. 21-23）」、「キール・大学地理学者研究大会（1940. 4. 20-21）」、「歴史家大会（ベルリン、1940. 6. 7-8）」、それに「ヴァイマル・ドイツ学全専門家大会（1940. 7. 5-7）」が数えられた。*Kieler Blätter*, 1940, 398f., 400f. に依る。

(151) 参加者名簿については、H. Berve Hg., *Das Neue Bild der Antike*, Leipzig 1942, Bd.1, 393f., Bd. 2, 457f. を参照〔*本拙訳、訳者付記参照〕。

(152) Berve Hg., 同書、Bd.1, 9を参照。ここでは、1940年7月4日付きのフリードリッヒ・マイネッケのケーラー (S. A. Kaehler) 宛書簡の周知の立場を想起させられる。K. F. Werner, *NS-Geschichtsbild* (註9), 104f. を参照。**Altertumswissenschaft Großdeutschlands*.

(153) 更に、1941年4月2－3日、ベルリン＝ダーレム、ハルナック館における古代学専門大会の刊行されたプログラム (MA 129/9 fol. 54169) を参照。

(154) ルストは、専門大会の多くの講演を訪れ、大会の閉会の際の懇親会にもまた参加した。Erich Burck, Fachtagung der klassischen Altertumswissenschaft, *Kieler Blätter* 1941, 245を参照。

(155) フェルキッシャー・ベオバハター (VB) の記事は、帝国現代ドイツ歴史研究所の新聞切り抜き資料庫でも確めることが出来なかった（この点は、註47を参照）。

(156) *Das Neue Bild der Antike*. ベルリン＝ダーレム、ハルナック館におけるドイツ古代学会議での講演。1941年4月3日付き *Berliner Börsen-Zeitung* を参照。

(157) Eine Tagung der Altertumswissenschaft, 1941年4月3日付き *Frankfurter Zeitung* を参照。

(158) Die römischen Staatsarchitektur. Schluß der Fachtagung der Altertumswissenschaft, 1941年4月5日付き *Börsen-Zeitung*, それと Neue Nachwirkung der Antike. Eine Tagung der Altertumswissenschaft in Berlin, 1941年4月8日付き *Frankfurter Zeitung* を参照。講演テーマの記録は、Berve, *Neue Bild*. Bd.1, 393f. Bd.2. 457f. 〔本拙訳、訳者付記参照〕。ベルリンでは、古代史家では、F. MiltnerとJ. Vogt、文献学者では、H. Bogner, E. Burck, U. KnocheとW. Schadenwaldtが、最後に考古学者では、E. LanglotzとG. Rodenwaldtが

講演した。

(159) Berve, *Neue Bild*, Bd.1, 5-12.

(160) 同書、6。

(161) 同書、7f.。

(162) 同書、8f.。

(163) 同書、218-236。著者は、ベルリン体育大学の講師、ルードヴィッヒ・エンゲレルト (Ludwig Englert) であった。*Die Gymnastik und Agonistik der Griechen als politische Leibeserziehung

(164) F. Zucker, Berve, *Neue Bild* Bd.1, 376 (369-388) を参照。*Die Bevölkerungsverhältnisse Ägyptens in hellenistisch-römischer Zeit.

(165) シャッヘルマイヤーは、ミルトナーの報告Die Antike als Einheit in der Geschichteを挙げていた。Berve, 同書、Bd. 2, 433-453。F. Schachermeyr, Fachbericht Alte Geschichte, *Rasse* 10, 1943, 118f. (118-120)を参照。シャッヘルマイヤーは、一連のこの専門報告を1936年に公にしていた。*Rasse* 4, 1936, 153-155, *Rasse* 4, 1937, 255-256, *Rasse* 5, 1938, 314-316, *Rasse* 6, 1939, 402-405, *Rasse* 8, 1941, 39-40, それと*Rasse* 9, 1942, 159-160。

(166) F. Schachermeyr, *Rasse* 10, 1943, 119.

(167) Hans Oppermann, Zur Lage der griechisch-römischen Altertumswissenschaft, *Deutschlands Erneuerung* 26, 1942, 574f. (574-579). Berve, 同書、Bd. 2 265-295を参照。

(168) 1944年2月15日付きエルクスレーベン宛ヴェーバーの書簡 (MA 141/-Nesselhauf fol. 35 0915)、及び本書、83 (第1部第2章第4節、本拙訳 [その2]、218頁) を参照。

(169) Oppermann, 同書、575。

(170) ベルフェは、彼をHZ (*Historische Zeitschrift*) の編集者委員会に入れると云うプランとの関連でも<全く穏健な>と位置づけられていた。Heiber, 前掲書 (註4)、288。ローゼンベルク当局における彼の評価に関しては、本書 (第1部第2章、本拙訳 [その2])、註11、及び (*訳者付加) 80 (本拙訳 [その2]、214、215頁) を参照。

(171) 1944年2月19日付きエルクスレーベンの党官房宛書簡 (MA 141/9-Nesselhauf fol. 3509 12)。E. ブルックによれば、Fachtagung der klassischen Altertumswissenschaften, *Kieler Blätter* 1941, 244は、彼自身 (Burck) とベルフェの話し合いによって指導されていた。ブルックの論稿を除いて (Berve, 同書、Bd. 2, 5-52)、ブルックの協力の別の証拠類は突き止めることが出来なかった。

- (172) Karl Reinhardt, Akademisches aus zwei Epochen, 同、*Vermächtnis der Antike*, hg. C. Becker, Göttingen 1960に所収(380-401)、398f。
- (173) 本書、48f。(第1部第2章、本拙訳〔その2〕、179頁)を参照。ミュンヘンでは、ベルフェによる<スバルタ>に関する講演は、1945年5月2日(!)となお広告されていた。1945年4月28日付き*Münchener Neueste Nachrichten*を参照。更に、H. Berve, *Sparta*, Leipzig 1937 (NDR. 1944)を参照。
- (174) *Großtaten deutschen Geistes—Die Aufgabe der deutschen Altertumswissenschaft, 1941年4月25日付き*Zeitschriften-Dienst*, 104。書籍版, Nr. 4422, 4-6 (RD 32/1)を参照。この<文化出版会議>(Kulturpressekonferenz)の組織については、Jürgen Hagemann, *Die Presselenkung im Dritten Reich*, Bonn 1970, 38を参照。
- (175) 1941年4月25日付き*Zeitschriften-Dienst*, 同書籍版、4を参照。
- (176) Neue Nachwirkung der Antike. Eine Tagung der Altertumswissenschaft in Berlin, 1941年4月8日付き*Frankfurter Zeitung*を参照。
- (177) J. Vogt, Unsere Fragestellung, 同, Hg., *Rom und Karthago. Ein Gemeinschaftswerk* Leipzig 1943, 7 (5-8)。ヨーゼフ・フォークトによる綱領的論稿が提示されており、その中で、ドイツ及びイタリアにおける同時代の古代の受容の種々異なる民族的な観点が強調されている。同、Unsere Stellung zur Antike, Breslau 1937 (110. *Jahresbericht d. Schles. Gesellsch. f. Vaterländische Cultur, Geisteswiss.* R. 3. 4)を参照。
- (178) Vogt, Fragestellung, 5、及び本書、119f。(第2部第1章第1節、未訳)を参照。
- (179) 1943年7月23日付き文化政策通報(*Kulturpolitischen Informationen*)、極秘 (IfZ, 1093/53)。
- (180) その関連は、同じ日に著された論稿「Rom—ein Kulturdenkmal Europas」、1943年7月23日付き*Zeitschriften-Dienst*, 89。書籍版, Nr. 9119, 3 (RD 32/1)に結果的に表れている。ローマの問題(römische Frage)が、なお問題として感じられていたことは、親衛隊保安部の<イタリアの文化政策的試み>と云う報告が示しているが、それは、ナチス党当局の著作物の審査を委ねられた党高官ブーラー(Reichsleiter Bouhler)に1942年に送付されていた。1942年12月8日付き親衛隊准将オーレンドルフ(Ohlendorf)のブーラー宛文書(NS 11/36)を参照。
- (181) 戦争プロパガンダとの関連には、K. v. Seeによって、共著(Gemeinschaftswerk)も入られている。Klaus von See, *Deutsche Germanen-Ideologie vom Humanismus bis*

- zur Gegenwart*, Frankfurt/Main 1970, 100。
- (182) Vogt, Fragestellung, 7.
- (183) 同論文、8。
- (184) Vogt, Hg., *Rom und Karthago*, 42f. (9-43) を参照。*Karthago in rassengeschichtlicher Betrachtung.
- (185) 同書、44、52、70 (44-82) を参照。*Völker- und Rassenkämpfe im westlichen Mittelmeer. Griechchen und Karthager auf Sizilien.
- (186) 同書、201 (178-202)。*Der Rassengegensatz als geschichtlicher Faktor beim Ausbruch der römisch-karthagischen Kriege.
- (187) K. v. See, 同書、100。
- (188) K. Christ, 前掲論文 (註31)、118。K. v. See, 同書、100を参照。
- (189) W. Koppen, Römer und Punier, 1943年8月14日付き VB (南ドイツ版)。Christ, 同論文、118も参照。
- (190) この標語は、ドイツ精神科学のあらゆる戦時動員に対して言われたのであった。Dietze, 前掲記事 (註146)、397 (強調は原文)。

訳者付記

本拙訳 (その2) の付記に記したReichsinstituts für Geschichte des neuen Deutschlands の訳を「帝国現代ドイツ史研究所」とし、「帝国新ドイツ史研究所」としなかった理由は、本文 87頁によっている。「帝国中世ドイツ史研究所」と訳したReichsinstituts für ältere deutsche Geschichteの訳も同様である。

「古代学自体の言行」は、Die Selbstdarstellung der Altertumswissenschaftenの訳であり、先に「古代学の自画像/自己演出」等としていたが、本号ではこのように変えている。より文意に添ってと考えたからである。また、Lagerも、「教員キャンプ」と訳されたりしているが、拙訳では「合宿活動」や「教員合宿」にしている。ナチス大学教員同盟に関しては、原著ではNSDとか、単にDozentenbund, NSD-Dozentenbundとあっても、訳では、適宜、ナチス大学教員同盟と記したり、単に大学教員同盟、また同盟だけにしたり、誤解が生じなければ自由にしている。

98頁、〔彼は、・・・この宿では、シュールンクスブルクの極めて重要な人物のようであったらしい〕は、So wäre er lieber als in diesem Haus ersten Ranges auf einer

Schulungsburg gewesenを訳しているが、この、シュールンクスブルクは、シュールンクが為されているヴェルツブルク市とを皮肉っぽく掛け合わせた造語で、「教育訓練城塞/市」等とすべきなのか・・・遺憾ながらなおはっきりと文意を掴み取れない個所である。また109頁の〔*・・・〕について一言。ここは、その時代の古代学界の内部事情を示唆する重要な個所であるが、同様になお文意を十分に捉えることが出来ない所で、補うことで明確になると考えた。

出典名は（その1）で記したが、その他凡例等も（その1）、（その2）の付記で記したことを踏襲している。なお、＜ ＞、《 》が付された文章等は、原文で》《、或いは＞＜で括られているものであるが（これ以上の、括弧は用いられていない）、イタリックで記された個所等も適宜、同様にした。《 》は、長い文章よりも、主に短い重要な語句、組織名、会合等に付したが、前後の文脈上、付した方がよいと判断した場合、組織名、会合等に関り、断りなく訳者の判断で付した場合もある。ただし、＜当局＞のように、頻繁に用いられる組織はその限りではない。＜ ＞内に更に括弧が来る場合には、《 》を用いた（原文では、＞＜が用いられている）。

研究ノートとして、第1部のみの部分的な翻訳紹介に過ぎないが、本章の「教員合宿」「戦時動員」などは言及されていても、この様な実際の内部にまで立ち入った詳細な研究には余り触れたことがなく（研究史をフォローしているわけでもない訳者にはこれ以上何も言えないが）、一つの専攻分野のケース・スタディとして興味深いものに思える。他の専攻分野の講座配置合宿、また戦時動員等の様子が分ればなお興味深いのではないか。

最後に、「戦時動員」において問題にされている古代史関係の二つの共著の論稿名（＝講演テーマ）と、執筆者名（＝参加者）、肩書等を出版時の原書に従って以下に紹介しておく。但し、二人を除きドクトル（Dr.）は省略した。註151、158を参照。*が付されているものは本文や註で触れられているものである。なお、ここで「軍務」とされているのは、z. Zeit im Feldの訳であり、辞書的には「現在出征中」であろうが、軍務としている。

▶*Das Neue Bild Der Antike*. Hg., Helmut Berve, Koehler & Amelang (Leipzig) 1942.
I Band: Hellas

・*Vorwort ; Helmut Berve [ライプツヒ大学古代史教授]

・Griechische Vorgeschichte ; Friedrich Matz [マールブルク大学考古学教授]

・Keramaikos, Ergebnisse der Ausgrabungen: Frühzeit ; K. Kübler

[アテネ・ドイツ考古学研究所支部、副支部長]

・Homer und sein Jahrhundert ; Wolfgang Schadewalt

[ベルリン大学古典文献学教授、現在、軍務]

- ・ Die Meisterung der Schrift durch die Griechen ; Richard Harder
〔ミュンヘン大学古典古代学教授〕
- ・ Der Glaube an die Olympischen Götter ; Bruno Snell
〔ハンブルク大学古典文献学教授〕
- ・ Archilochos und Solon ; Herman Gundert
〔ハイデルベルク大学古典文献学講師、現在、軍務〕
- ・ Die Bedeutung der neuen Funde in Olympia ; Ernst Langlotz [ボン大学考古学教授]
- ・ Die Bedeutung des Chors in der Tragödie des Aischylos ; Hans Bogner
〔シュトラスブルク大学古典文献学教授〕
- ・ Athen und das Griechentum im 5. Jahrhundert ; Hans Schaefer
〔ハイデルベルク大学古代史教授〕
- ・ Die Gymnastik und Agonistik der Griechen als politische Leibeserziehung ;
Ludwig Engert [ベルリン体育大学、哲学、医学博士]
- ・ Herodot ; Fritz Hellmann [ベルリン大学古典文献学講師]
- ・ Um Pheidias ; Bernhard Schweitzer [ライプツヒ大学考古学教授]
- ・ Die Geschichtsbetrachtung des Thukydies ; Franz Egermann
〔グライフスヴァルト大学古典文献学教授、現在、軍務〕
- ・ Weltbild und Sprache im Heraklitismus ; Hans Diller [キール大学古典文献学教授]
- ・ Platos Staat der Erziehung ; Hans-Georg Gadamer [ライプツヒ大学哲学教授]
- ・ Hellenismus und Hellenentum ; H. Herter [ボン大学古典文献学教授]
- ・ Die Stoa, Geschichte einer geistigen Bewegung ; Max Pohlenz
〔ゲティンゲン大学古典文献学元教授〕
- ・ *Die Bevölkerungsverhältnisse Ägyptens in hellenistisch-römischer Zeit ;
Friedrich Zucker [イエーナ大学古典文献学教授]

II Band : Rom

- ・ Die altrömische Familie ; Erich Burck [キール大学古典文献学教授]
- ・ Das Grabsmal des Porsenna ; Franz Messerschmidt
〔ケーニヒスブルク大学古典考古学教授〕
- ・ Der Anfang der römischen Literatur ; Hans Drexler

〔ゲティンゲン大学古典文献学教授〕

- ・ Die italische Wurzel der römischen Bildniskunst ; Reinhard Herbig

〔ハイデルベルク大学古典考古学教授〕

- ・ Raumauffassung und Raumordnung in der römischen Politik ; Joseph Vogt

〔テュービンゲン大学古代史教授〕

- ・ Gottheit und Mensch im Wandel der römischen Staatsform ; Carl Koch

〔グラーツ大学古典文献学講師〕

- ・ Entwicklungsstufen des römischen Eigentums ; Franz Wieacker

〔ライプツヒ大学ローマ法、市民法教授〕

- ・ Caesar ; Matthias Gelzer 〔フランクフルト大学古代史教授〕

- ・ Die geistige Vorbereitung der Augusteischen Epoche durch Cicero ;

Ulrich Knoche 〔ハンブルク大学古典文献学教授〕

- ・ Virgil ; Friedrich Klingner 〔ライプツヒ大学古典文献学教授〕

- ・ Mos maiorum als Grundzug des Augusteischen Prinzipats ; Hans Volkmann

〔グライフスヴァルト大学古代史教授、現在、軍務〕

- ・ Horaz, Dichtung und Staat ; Hanz Oppermann

〔シュトラスブルク大学古典文献学教授〕

- ・ Seneca und Rom ; Hellfried Dahlmann 〔マールブルク大学古典文献学教授〕

- ・ Elemente der römischen Kunst am Beispiel des flavischen Stils ;

P. H. von Blanckenhagen 〔博士、マールブルク〕

- ・ Inschriften an römischen Strassen ; Hans Ulrich Instinsky

〔ベルリン・プロイセン科学アカデミー学術公務員〕

- ・ Römische Staatsarchitektur ; Gerhart Rodenwardt 〔ベルリン大学考古学教授〕

- ・ Konstantins christliches Sendungsbewußtsein ; Johannes Straub

〔ベルリン、現在、軍務〕

- ・ Die Ostalpen in der Spätantike ; Rudolf Egger

〔ヴィーン大学ローマ史、ローマ碑文学教授〕

- ・ Das Römerreich unter germanischer Waltung, von Stilicho bis Theoderich ;

Wilhelm Enßlin 〔エアランゲン大学古代史教授〕

- ・ *Die Antike als Einheit in der Geschichte ; Franz Miltner

〔インスブルック大学古代史教授〕

▶ *Rom und Karthago, Ein Gemeinschaftswerk.* Hg., Joseph Vogt, Koehler & Amelang
1943.

・ *Unser Fragestellung ; Joseph Vogt (上記)

・ *Karthago in rassengeschichtlicher Betrachtung ; Fritz Schachermeyr

〔グラーツ大学古代史教授〕

・ *Völker- und Rassenkämpfe im westlichen Mittelmeer ; Fritz Taeger

〔マールブルク大学古代史教授〕

・ Die Gestaltung des römischen und des karthagischen Staates bis zum Pyrrhos-
Krieg ; Alfred Heuß 〔ブレスラウ大学古代史教授〕

・ Das archäologische Bild des Puniertums ; Reinhard Herbig

〔ハイデルベルク大学古典考古学教授〕

・ *Der Rassengegensatz als geschichtlicher Faktor beim Ausbruch der römisch-
karthagischen Krieg ; Matthias Gelzer (上記)

・ Wesen und Gesetz römischer und karthagischer Kriegführung ; Franz Miltner
(上記)

・ Die Einfluß Karthagos auf Staatsverwaltung und Wirtschaft der Römer ;

Wilhelm Enßlin (上記)

・ *Das Bild der Karthager in der römischen Literatur ; Erich Burck

〔キール大学古典文献学教授、現在保安警察隊〕

・ Das Puniertum und die Dynastie des Septimius Severus ; Joseph Vogt (上記)